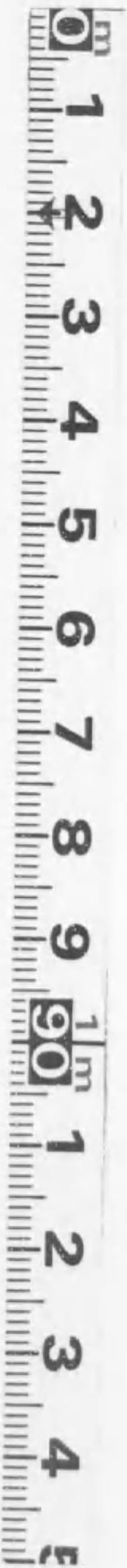


501

24



始





109

作 ドルイワ

譯 蘭 紫 月 若

# メロサ



京 東

社 光 極

MCMXXI



501-24



ワ イ ル ド 作

メ 口 サ

若 月 紫 蘭 譯

東 京

極 光 社

MCMXXI

大 正

10 4 21

交 内



### はしがき

サロメは何といつても、オスカア、ワイルドの戯曲中の最も優れたものである。いな、ワイルドの戯曲中の最も優れたものであると同時に、有ゆる近代劇中の最も優れたものゝ一つである。其官能の描寫の素晴しさと力強さに於ては、殊に他人の随追をゆるさぬものがある。

私は數年前サロメを翻譯して公にしたが、それにはまだ甚だ嫌足らぬところが多かつた。即ち改めて譯し直して、再び之を世に問ふ吹笛である。

附録としてつけた、アンドレエエフ、の「隣人の愛」は一寸、皮肉な面白いもので、丁度手許にあつたからそへた丈けである。

一九二一年三月二十四日

紫蘭しるす

(1)



人物

ヘロド・アンチバスの、猶太王。

ヨカナアン、豫言者。

若きシリア人、近衛の大尉。

チゲリヌス、若き羅馬人。

カツパドシア人。

ヌビア人。

第一の兵士。

第二の兵士。

ヘロチアスの扈從。

猶太人、ナザレ人など數人。

奴隸。





ナアマン、首斬役。

ヘロヂアス、猶太王の妃。

サロメ、ヘロヂアスの娘。

サロメの奴婢数人。

舞 臺

饗應の間の上にあるヘロド王の宮殿内の大きな廣場ナレキス。兵士数人が欄干にもたれかゝつて居る。右側には大きな階段。左側奥の方には綠色の青銅の側をつけた古井戸。月夜。

若きシリア人 サロメ王女は、今夜は、まあ、何といふ美しさだり

ヘロヂアスの扈從 あのを月を御覽なさい！ 何て變に見えるんでせう！ 墓穴の

中から出て来る女メナゴのやうだ。死んだ女のやうだ。死人をさがしてでもゐるやうではありませんか。

若きシリア人 王女は變な顔つきをして居らつしやる。黄色なゼエルを被つて、銀の足をした小さい王女のやうだ。小さい白鳩の足をした王女のやうだ。王女が踊つてらつしやるやうではないか。

ヘロヂアスの扈從 月は死んだ女のやうだ。大變ゆつくりと動いてゐる。

(舞臺の間で騒ぐ音す。)

第一の兵士 何て騒動だい！ 吠えてる野獸どもは、一體何者だ？

第二の兵士 猶太人だ。奴等いつもあれだ。お宗旨の喧嘩をやつてるんだ。

第一の兵士 どうして、お宗旨の喧嘩なんかやるんだ？

第二の兵士 それは知らんが。いつもやつてるんだ。例へて見りや、パリサイ派の奴等が天使エンゼルといふものがあるといふと、サドカイ派の奴等は天使なんてあり



やしないつていふんだ。

第一の兵士　そんなことで喧嘩なんぞするのは、馬鹿／＼しいと思ふなあ。

若きシリア人　サロメ王女の、今夜の美しさはどうしたのだ！

ヘロデアスの扈從　貴方は、しよつちう王女ばかり見て居ますね。あんまり見過ぎてゐますよ。そんな風に人を見つめて居るのは危ないですよ。何か恐ろしいことでも起つて来さうだな。

若きシリア人　王女は今夜は全く奇麗だ。

第一の兵士　王様は陰氣な顔をしてゐらつしやるなあ。

第二の兵士　さう、陰氣な顔をしてゐらつしやるなあ。

第一の兵士　何だか見つめてゐらつしやるよ。

第二の兵士　誰か見つめてゐらつしやるんだ。

第一の兵士　誰を見てゐらつしやるんだらう？

第二の兵士　分らないさ。

若きシリア人　王女はマア、何て青白いんだ！　あんな青白い顔をしてらつしやるのを見たことがない。銀の鏡にうつゝた白薔薇の影のやうだ。

ヘロデアスの扈從　貴方は王女をみつめてはいけません。あんまり、みつめ過ぎてをられます。

第一の兵士　お妃が王様のコップにおつぎなされた。

カツバドシア人　あれがお妃のヘロデアス様かい、あの眞珠で飾つた黒い冠を被つて、髪の毛に青い粉をつけてお出でなさるのが？

第一の兵士　さうさ。あれがお妃のヘロデアス様だ。

第二の兵士　王様は葡萄酒が大變好きだ。三通の葡萄酒を召上るんだよ。サモスレエスの島からもつて来るのは、羅馬皇帝の上衣のやうな紫色だ。

カツバドシア人　おれは羅馬皇帝を見たことがない。



第二の兵士　それからサイブラスの町から来るのは、黄金のやうに黄色だ。

カツバドシア人　おれは黄金が好きだ。

第二の兵士　それから三番目のは、シ、リイから来る葡萄酒だ。それは血のやうに赤いんだ。

ヌビア人　おれの國の神様達は、血が大好きだ。年に二度づゝ、若い男と女を人身御供にあげるんだ。男の子を五十人と、女の子を百人となあ。それでゐて、とつてもまだ御供物が足りなさうなんだ、なせだつて神様達がおれどもにえらうきつくなさるんだものなあ。

カツバドシア人　おれの國にや、神様なんて一人も居やしない。羅馬人がみんな追拂つちまやあがつた。神様は山山中へ隠れてるといふものがあるが、おれは本當にしない。實は三晩といふものおれは山山中に居て、どこもかもさがして見たが、神様はめつからなかつた。それから、たうとおれは神様達の名を呼ん

で見たが、それでも神様は出て來やしなかつた。おれは神様達は死んだんだらうと思ふがな。

第一の兵士　猶<sup>シッ</sup>人は、お前なんぞに見えない神様を拜んでゐるんだつて。

カツバドシア人　おれにやそんなことはわからない。

第一の兵士　本當に眼で見えないものを信仰してるのは猶<sup>シッ</sup>人ばかりだよ。

カツバドシア人　そんなことは、おれなんぞから見ると、全く馬鹿／＼しいことだ。

ヨカナアンの聲　おれの後から、すつと／＼強いものがやつて來るだらう。おれは、その人の靴の紐を結べるほどの價值もないものだ。その人が來ると、淋しい所が喜ばしうならう。其場所が百合のやうに咲き盛るだらう、盲人の眼にも日が見えよう、聾の耳も聽えるやうにならう。生れたばかりの赤ん坊が、龍の寢床に手を置きよう、獅子の鬣<sup>たてがみ</sup>を引いてあるけるだらう。



第二の兵士　彼奴をだまらして呉れよ。しよつちう馬鹿げたことばかりをほざいて居やがる。

第一の兵士　いやだ。あれは聖者だ。そして大變に穩かな人だ。毎日おれが食べものを進めると、おれにお禮をいふよ。

カツバドシア人　誰だい、あれは？

第一の兵士　豫言者だ。

カツバドシア人　名前は何といふのだ？

第一の兵士　ヨカナアン。

カツバドシア人　何處から來たんだい？

第一の兵士　沙漠から來たんだ。其處でいなご蝗と野蜂の蜜を食つてたんだ。駱駝の毛を着て、腰にはなめし革の帶をしめて居た。顔をみるとぞつとするやうだつたよ。いつもく大變な人が、後をついて歩いてた。弟子まで居たんだつて。

カツバドシア人　あの男、何をいつてるんだい？

第一の兵士　分らないさ。時には恐ろしいことを云つてるが、何を云つてるんだか、とても分りつこなしさ。

カツバドシア人　あの男に會つてもいゝかなあ？

第一の兵士　駄目だ、王様がそれをお禁まめになつたんだ。

若きシリア人　王女は扇で顔をお隠かくしなかつた。小さい白いお手が、鳥家とやへ飛んで行く鳩のやうに、ヒラリヒラリしてゐる。白い蝶々のやうだ。まるで白い蝶々のやうだ。

ヘロヂアスの扈從　それが貴方にどうしたといふのです？　なせ貴方はあの方を見つめられるのです？　あの方を見つめちやいけません。恐ろしいことになるかも知れませんからね。

カツバドシア人　(水溜を指して) 變な牢屋だなあ！



第二の兵士　古い水溜だ。

カツバドシア人　古い水溜だつて！　體にわるいだらうな。

第二の兵士　なあにさ！　あの王様のお兄い様の、ヘロヂアス様の前の御亭主、

あの方は十二年もあの中に入れられてお出でなすつた。それでも死にはなさらなかつた。そしてたうとう十二年の後に、絞め殺されておしまいなさらなきやならなかつた。

カツバドシイ人　絞め殺された？　誰がそんな思ひ切つたことをしたのだ？

第二の兵士　（首斬役の大きな黒奴を指して）　ほら、あの男だ、ナアマンだ。

カツバドシア人　あの男、よく恐くなかつたんだね？

第二の兵士　いや、王様があれに指輪をおやりになつたんだ。

カツバドシア人　何の指輪を？

第二の兵士　死の指輪さ。だから恐こわくなかつたんだよ。

カツバドシア人　でも、王様を絞め殺すなんてことは恐ろしいことだぜ。

第一の兵士　どうして？　王様だつて、他の人間と同じやうに、首は一つきやありやしないよ。

カツバドシア人　おれは恐いと思ふなあ。

若きシリア人　王女がお立ちなすつた！　食卓をお逃げなさるところだ！　大變

に心配事があるやうだ。おや、此方の方へ入らつしやる。さうだ、おれ達の方へいらつしやるんだ。何て真青だろ！　あんな真青なお顔を見たことがない。

ヘロヂアスの扈從　あの方を見つめないでゐて下さい。後生です、あの方を見つめるのをやめて下さい。

若きシリア人　王女は路に迷うた鳩のやうだ。……風にゆれてる水仙のやうだ。  
……銀色の花のやうだ。



サロメ あんなところに居るのは眞平だ。ゐられるものか、どうして王様は、まはだ臉を  
ぶる／＼とふるはして、木鼠きねずみのやうな眼で、しよつちうわたしを見つめて居る  
のだらう。お母様の御亭主が、あんなにわたしを見つめてゐるのは變だ。何の  
ことだか、譯が分らない。いや、本當は、さうだ、屹度さうにきまつてる。

若きシリア人 殿下は、只今宴會をお外はつしになりましたのですね？

サロメ 此處はまあ、何といふいゝ氣持だらう！ 此こゝでやつと息が出来る！ あ  
すこでは、ジェルサレムから來た猶人ゾウたちは、馬鹿／＼しい儀式のことで喘み  
つき合つてる、野蠻人はやたらに飲んで／＼床の上にお酒をひつくりかへす。  
スミルナから來た希臘人は、眼や頬に彩色をして、縮れ毛をぐる／＼に巻きあ  
げてる。黙つた狡猾い埃及人は、疲れた馬のやうな長い爪をして、赤茶けた外  
套を着て居る。野蠻な粗暴な羅馬人は卑陋なおしやべりをしてるといふ風だも  
の。あゝ、なんていやな羅馬人だ！ 亂暴で野卑で、その癖貴族でゝもありさ

うな風をしてる。

若きシリア人 處で、お掛けなされませ、殿下。

ヘロデアスの扈從 なせ貴方は殿下に話をしたりなぞなさるんです？ なせあの  
方を見つめたりなさるんです？ 何だか恐ろしい事でも起りさうだな。

サロメ 月を見てると、本當にいゝ氣持だ！ 月は小さいお金のやうだ、小さい  
銀の花のやうだ。月は冷たくつて純潔だ。屹度處女だ、處女の美しさをもつて  
るんだ。さうだ、處女だ。まだ身をけがしたことなんか無いんだ。ほかの女神  
達と同じやうに、男に體なんぞまかせたことはないんだ。

ヨカチアンの聲 主がおいでなされた。人の子がおいでなされた。セントオロス  
（馬身人首の怪物）は、河の中へ隠れてしまった。サイレンは河からにげだして、  
森の落葉の下に寝て居る。

サロメ 大きな聲をしたのは、誰だえ。



第二の兵士 豫言者で御座ります、殿下。

サロメ あゝ、豫言者！ あの王様の恐がつてる、あの人がかえ？

第二の兵士 私し共はそんなことは何にも存じません、殿下。大きな聲をしたのは、豫言者のヨカナアンで御座います。

若きシリア人 殿下。お輿をもつて参らせませうか、今夜は庭の中は大變い、景色で御座います。

サロメ あの人は、お母様のことで、恐ろしいことをいつてゐたらう？

第二の兵士 何をいつてるんだか一寸も分りません、殿下。

サロメ さうだ、お母様のことで、恐ろしいことを云つてるのだ。

(奴隷登場)

奴隷 殿下 國王陛下が、どうぞ、お席へお戻りになるやうにとのこと御座ります。

サロメ わたしはいやだ。

若きシリア人 恐入りますが、殿下、でもお戻りになりませんか、何か悪いことが起らぬとも限りませんが。

サロメ あの豫言者は年寄かえ？

若きシリア人 殿下、おもどりになつた方が宜しう御座いませう。恐れながら御案内致しませう。

サロメ 豫言者は……あの人は年寄かえ？

第二の兵士 いゝゑ、殿下、全く若い男で御座ります。

第二の兵士 確にさうとはいへないよ。あれは、エリアスだといふものもあるよ。サロメ エリアスつて誰だえ？

第二の兵士 此國のごく昔の豫言者で御座ります、殿下。

奴隷 國王陛下には、何と御返事を申上げますで御座いませうか？



曰物ナアンの聲　バレスチンの國よ、お前を打つた筈が折れたからといつて、喜ぶまいぞよ。なせだといつて、蛇の種から毒蛇が出て來ようぞよ、そして、それから生れた奴は鳥を食はうぞよ。

サロメ　何といふ妙な聲だらう！　わたしはあの入と話しがして見たい。

第一の兵士　それは駄目で御座りませう、殿下。國王陛下は誰でもあの男と話をするのが御嫌ひで御座ります。頭の坊様が、あの男と話をするのをさへお禁止になりました。

サロメ　わたしはどうしても、あの入と話しがして見たい。

第一の兵士　駄目で御座ります、殿下。

サロメ　わたしは、どうあつてもあの入と話をする。

若きシリア人　宴會場へ、お戻りになつた方が、およろしうは御座りませぬでせうか？

サロメ　あの豫言者をつれてお出で。

(奴隷退場)

第一の兵士　それは出来ません、殿下。

サロメ　(水溜に近づいて、中へのぞき込んで)　マア、何といふ暗さだ！　こんな暗い穴の中に居るのは、どんなにか恐ろしいことにちがひない！　墓穴のやうだ……  
(兵士に)お前達はきこゑなかつたのかえ？　豫言者をつれておいでわたしはあの人に遇いたいのだ。

第二の兵士　殿下、それはどうか御許しを願ひたう御座ります。

サロメ　お前達は、わたしをぢらすのだね！

第一の兵士　殿下、私共の一命はお手のもので御座ります。けれども、只今の仰せだけは私共には出来ません。どうかそれだけは仰せつけられませぬやうに。

サロメ　(若きシリア人を見て)　あゝ！



ヘロヂアスの扈從。 まあ！ どうなることだらう？ 屹度何かよくないことが起つて来るだらうな。

サロメ (若きシリア人のところへ歩いて行つて)

お前は、わたしにこれをしてお呉れだろ、どうだえ？ ナラボスや、お前は屹度してお呉れだろ。わたしはいつもお前に親切だつたね。お前は屹度して呉れるだろ。わたしはたゞ此の不思議な豫言者が見たいのだ。それはあの人については、いろ／＼と噂をきいたさ。王様もあの人のことを、よく話してをられた。でも王様はあの人を恐がつて居られるやうだ。お前、お前もあの人を恐いのかえ？ ナラボスや。

若きシリア人 私しは、あの男を恐がりは致しません、殿下。私には恐いものは御座いません。でも國王陛下は、誰でもあの水溜の蓋をあげてはならぬと、厳しくお止めになりました。

サロメ お前はわたしにこれをしてお呉れだろ、ナラボスや。さうすりや、あした、輿に乗つて、偶像賣の門の下を通る時に、わたしはお前に小さい花を落してあげるよ、小さい緑りの花をね。

若きシリア人 殿下、わたくしには出来ません。とても出来ません。

サロメ (微笑しながら) お前はわたしにしてお呉れだろ、ナラボスや。ねえ、お前はあたしに屹度して呉れるだろ。さうすりや、あした、偶像賣のある橋の側を通る時に、わたしはヴェルの中から、お前を見てやるよ。屹度お前を見てやるよ、いや、ナラボスや、大方わたしは笑つて見せてやるかも知れないよ。わたしを御覽よ。ナラボスや、わたしを御覽よ。まあ、お前はわたしの頼みをきいて呉れるだろ、ねえ。ねえ、よく分つてるだろ……お前がきいて呉れることはわたしはちやんと知つてる。

若きシリア人 (第三の兵士に合圖をして) 豫言者を引出せ。……サロメ殿下がお遇いな



さるのだ。

サロメ

へロヂアスの扈從　　まあ、月はなんて變に見えることだ。白無垢で體を包まう

としてゐる、死んだ女の手のやうだ。

若きシリア人　　全く變だなあ、琥珀の眼をした小さい王女のやうだ。モスマン

の雲の中から、小さい王女のやうにニコニコと笑つてゐる。

ヨカナアン　　溢れかゝつて居る穢の杯をもつた男は、何處に居るのだと、銀の衣

を着て、いつか大勢の眼の前で、死ななければならぬ男は何處に居るのだ？

沙漠の中や宮殿の中で、叫んだ人の聲が聞えるやうに、その男を此處へ出て來

させい。

サロメ　　あの人は誰のことを云つてゐるのかえ？

若きシリア人　　人とても分りませんが御座います、殿下。

ヨカナアン　　壁の上に書いた男共の肖像を見て、繪の具で飾つたカルデア人の肖

像を見て、自分の眼の慾の中にその身をすて、しまつて、カルデアの國へ使節

をやつた女は何處に居るのだ？

サロメ　　あの人はお母様のことを云つてゐるのだ。

若きシリア人　　まあさうでは御座りませんが、殿下。

サロメ　　いゝや、あの人の云つてゐるのはお母様のことだ。

ヨカナアン　　腰には飾帶をつけて頭には色んな彩の冠をかぶつた、アッシリア

の隊長どもに、身をまかせた女は何處に居るのだ？　立派な麻や紫の着物をま

か、金の楯をもち、銀の兜をかぶつて、巨大な體の埃及の若い男どもに、身を

まかせた女はどこにゐるのだ？　その女に、主のために道をひらく人の言葉が

きこえるやうに、自分の罪を悔むことが出来るやうに、穢辱の寢床、血族相



犯の寢床から、その女を起してやれ。もしその女が罪を悔いないで、まだ其穢にくつゝいて居るなら、その女を此處へ來させい、主の扇は今その手の中にある。

サロメ　おう、恐い人だ、恐い人だ！

若きシリア人　殿下、どうぞ、此處に居らつしやいますな。

サロメ　何よりも恐いのは、あの人の眼だ。チリアの花氈に、炬火であけた黒い穴のやうだ。龍の住つてる眞黒な洞穴のやうだ。毒蛇の子を生む龍が住んでるあの埃及の眞黒な洞穴のやうだ。幻の月の光になやまされた、黒い湖のやうだ……あの人はまだ何か病だいなのか。

若きシリア人　此處にゐらつしやいますな、殿下。どうぞ此處にゐらつしやいますな。

サロメ　あの人のやつれてをることはどうだ！　あの人はやせた象牙の像のやう

だ、銀の肖像のやうだ。屹度あの人は、お月様のやうに潔白な人なんだ。月の光のやうなんだ、銀の箭のやうなんだ。あの人の體は、象牙のやうに冷たいにちがひない。わたしはもつと傍へ寄つて見たい。

若きシリア人　いけません、いけません、殿下。

サロメ　わたしは、もつと傍へよつて、あの人をよく見なくてはならない。

若きシリア人　殿下、殿下。

ヨカナアン　おれを見つめて居る此女は誰だ？　おれはあの女に見て貰ひたくない。あのびか／＼と光つてる臉の下の金色こんじよの眼で、何のためにあの女はおれを見つめてゐるのだ？　あの女は誰れだか、おれには分らない。また知りたくもない。あの女を逃がしてくれ。おれが話のしたいのはあの女ではない。

サロメ　わたしはサロメだ。ヘロデアスの娘、ユデアの王女だ。

ヨカナアン　下れ！　パピロンの娘！　主から選ばれたものに近よるな。お前の



母親は、自らの穢れの酒を此の地上に溢らせた。あの女の罪の叫びは、神様の  
せら耳にもとやいれたぞよ。

サロメ　も一度話してお呉れ、ヨカナアン。お前の聲はわたしには酒のやうだ。  
若きシリア人　殿下！　殿下！　殿下！

サロメ　も一度いつてお呉れ！　も一度話してお呉れ、ヨカナアン、わたしは  
すべきことを、云つてきかせてお呉れ。

ヨカナアン　ソドムの娘、傍へよるな！　そして、ヴェルで顔をかくして、頭の  
上に灰を撒いて、沙漠へ行つて、人の子をさがすがいい。

サロメ　誰のことだえ、人の子つて？　お前のやうな奇麗な人かえ？　ヨカナア  
ン。

ヨカナアン　下れ！　宮殿の中で、死の天使の羽の音のしてゐるのがきこえる。  
若きシリア人　殿下、どうぞ奥へおはいりなされて下さいまし。

ヨカナアン　わが主、神の御使、剣をもつて此處で何をなされます。此穢れた宮  
殿の中で、何をさがしておいでになりますか？　銀の衣を着て死ぬべきあの男の  
最後の日はまだまゐりません。

サロメ　ヨカナアン！  
ヨカナアン　誰だ、呼んでるのは？

サロメ　ヨカナアン、わたしはお前の體が好きだ！　お前の體は、また鎌のはい  
つたことのない、野原の百合のやうに眞白だ。お前の體は、山の上の雪のやう  
に、やがて谷間に下りて来る、エデアの山の雪のやうに眞白だ。アラビアの女  
王の花園の薔薇でも、お前の體のやうに白くはない。アラビアの女王の花園、  
アラビアの女王の、あの香ばしい香料の花園の薔薇でも、あけ方の草葉の上に  
降りて来る足でも、海の胸の上に寝てる時の月の胸でも、……世の中のありと  
あらゆるものの中に、お前の體ほど白いものはない。どうか、わたしにお前の



體にさはらしてお呉れ。

ヨカナアン。下れ！ バビロンの娘！ 世の中へ罪惡の來たのは女の勢だ。おれに物をいふな。おれはそちのいふことはきかない。たゞ神様の聲だけをきくのだ。

サロメ。お前の體は氣味が悪い。癩病の體のやうだ。毒蛇の匍つた塗壁のやうだ。蠍が鼻をくつた塗壁のやうだ。穢ないものが一杯はいつた、白塗の墓のやうだ。こはい、お前の體はこはい。わたしの氣に入つたのは、お前の髪の毛だ、ヨカナアン。お前の髪の毛は、葡萄の房のやうだ。エドマイト人の國の、エドムの蔓から垂れさがつた、葡萄の房のやうだ。お前の髪の毛は、レバノンの杉の木のやうだ。晝中に、獅子や泥棒に蔭をかしてやる、レバノンの大きな杉の木のやうだ。月が姿をかくしたり、星が恐がる長い眞暗な夜でも、それほど黒くはない。森の中に住つてゐる沈黙でも、それほど黒くはない。世の中にお前の髪

のやうな黒いものはない……お前の髪の毛にさはらしてお呉れ。

ヨカナアン。下れ、ソドムの娘！ 觸らすことはならぬ、神様のお寺を汚して糞ふまい。

サロメ。お前の髪の毛は恐い。泥だらけ、ほこりだらけだ。お前の額にのつかつてる、荊の冠のやうだ。お前の頸の周りに蟻つてる、黒い蛇の結び目のやうだ。わたしは、お前の髪の毛は嫌いだ。……わたしの欲しいのは、お前の口だ、ヨカナアン。お前の口は、象牙の塔の上の、紅の紐のやうだ。チイルの花園に咲いてる柘榴の花は、薔薇の花よりかすつと赤いが、お前の口ほどに赤くはない。帝王の近づきを知らせて、敵を恐らかす喇叭の赤い音も、そんなに赤くはない。お前の口は葡萄酒桶の中にはいつて、葡萄酒をふんでる杜氏の足よりかすつと赤い。お前の口は、お寺にやつて來て、坊さん達に餌をもらつてゐる鳩の脚よりかすつと赤い。獅子を殺して、立派な虎を見て、森の中から出て來た男の足



よりも赤い。お前の口は漁師が海の底の薄明りの中で見つけて、帝王のために  
しまつて置く珊瑚の枝のやうだ！ モアバイト人が、モアアの鑛山から掘出し  
て、帝王の手にわたす朱のやうだ。朱を彫つて、珊瑚でかざつた、波斯王の弓  
のやうだ。世の中にお前の口ほど赤いものはない。……お前の口に接吻させて  
お呉れ。

ヨカナアン　ならん！　バビロンの娘！　ソドムの娘！　決してならん。

サロメ　わたしは、お前の口に接吻するのだ、ヨカナアン、どうしてせせりに置く  
ものか。

若きシリア人　殿下、殿下、没薬の花園のやうな、鳩の中の鳩のやうなあなたは  
此男を御覧なさいますな、あの男をお見つめなさいますな！　あの男に、あんな  
言葉をおかけなさいますな。私しはきいて居るに恐びません。……殿下、殿  
下、あんなことを仰つしやつて下さいますな。

サロメ　わたしは、お前の口に接吻するのだ、ヨカナアン。  
若きシリア人　あゝ！

(若き大尉は自殺してサロメとヨカナアンとの間に介れる。)

ヘロデアスの扈從　若いシリア人は自殺した！　若い大尉は自殺してしまつた！  
わたしの友達だつたあの男は自殺した！　わたしが香料の小さな箱と、銀の耳  
輪をやつた男は今自殺してしまつた！　おう、あの男は前から、何か不吉なこ  
とが起りさうだと云つてゐた。わたしも前からそれを云つてゐた、そして、そ  
れが今起つたんだ。さうだ、わたしには、月が死人を探してるといふことが分  
つて居た。でも月の探してるのが、あの男だとは思はなかつた。まあ！　わた  
しはどうして、あの男を月から隠してやらなかつたらう？　洞穴の中へ隠して  
置いてゐたら、月には見えなかつたらうに。

第一の兵士　殿下、若い大尉は、只今自殺されました。



サロメ　お前の口に接吻させてお呉れ、ヨカナアン。

ヨカナアン　お前は恐くはないか、ヘロヂアスの娘？　死の御使の羽の音が、宮殿の中で聞えたと、おれはお前に云はなかつたか、それから、死の御使が来たではないか？

サロメ　お前の口に接吻させてお呉れ。

ヨカナアン　姦淫の生んだ娘よ、お前を救ふことの出来るものが、たつた一人ある、おれがさきに云つた、あの一人一人じゃ。行つてその方をさがすがいい。その方はガリリイの海で、短艇に乗つて居られる、そして弟子どもに話しをして居られる。海岸に行つて膝まづいて、名を云つて、その方を呼ぶがいい。誰でも、その方の名を呼ぶものゝところへ來られるのだから、その方がお前のころへ來られたら、その方の足もとに膝まづいて、罪のお許しを願ふがいい。

サロメ　お前の口に接吻させてお呉れ。

ヨカナアン　咀はれて居れ、不義の母の娘、咀はれて居れ！

サロメ　わたしは、お前の口に接吻するのだ、ヨカナアン。

ヨカナアン　お前の顔は見るもいやだ、誰が見るものか、咀はれて居れ、サロメ　お前は咀はれて居れ。

(豫言者、水溜に降りて行く。)

サロメ　わたしはお前の口に接吻するのだ、ヨカナアン。どうして接吻せずに置くものか。

第一の兵士　何處か他のところへ、此死骸をもつて行かなくてはなるまい。王様は、御自分でお殺しなされた以外の、死骸は御嫌ひだ。

ヘロヂアスの扈從　あの男は私しの兄弟だつた。兄弟よりも近いものだつた。私しはあの男に、香料の一杯はいつた小さい箱と、瑪瑙の指輪とをやつたら、その指輪を終始指しよつちうにはめて居た。夕方には、二人でいつも川邊の杏の樹の中を散



歩することにして居た。するとあの男は、いつも自分の國の、色んなことを話すのが癖だつた。いつも細い聲でものを云つて居た。あの男の聲は、笛のやうだつた。それからまた、あの男は川にのぞいて、自分の姿を見るのが大變好きだつた。私しはあの男がそれをするのを、いつも意見をしてゐた。

第二の兵士　本當にさうだ。此死骸をかたつけなくてはなるまい。國王陛下の御目にとまつてはなるまい。

第一の兵士　陛下は此處へお出ではなるまい。決して此廣場へはゐらつしやるまい。ひどく豫言者を恐がつて居らつしやるんだもの。

(ヘロツド王、ヘロデアス妃及び、有ゆる従者等登場。)

ヘロツド王　サロメは何處に居る？　王女は何處に居る？　宴席へ戻つて來いといつたのに、何故歸つては來なかつた？　はあ！　あすこに居るな！

ヘロデアス妃　あなた、あれの顔ばかり御覽なすつてはいけません！　あなたは

終始あればつかりみつめてゐらつしやる！

ヘロツド王　今夜は月が妙な姿をして居る。妙な姿をして居るではないか？　氣のちがつた女のやうだ。行きつく先で、戀人をさがして居る氣のちがつた女のやうだ。おまけに月は裸だ。すつ裸だ。雲はすつばだかの月に、着物を着せようとしてあせつてゐるが、月はそれをさせないのだ。裸で空に出て居る。酔ばらつた女のやうに、雲の中をよろり／＼と歩いて居る。……屹度月は戀人をさがしてゐるのだ。酔ばらつた女のやうに、よろり／＼と歩いてゐるではないか？　どうも氣のちがつた女のやうだ。さうではないか？

ヘロデアス　いゝゑ。月は月のやうです。それだけで御座います。奥へまゐりませう。……あなたは、此處には何の御用もない筈です。

ヘロツド　いや、此處に居る！　マネツセエ、あすこに敷物を敷け。炬火をつけい、象牙のテエブルを出せ、それから碧玉のテエブルを出せ。此處は空氣がい



「客たちと、もつと酒をのまう。羅馬皇帝の使者達に、出来る限りの敬意を表しなくてはならない。」

ヘロデアス　あなたの此處にゐらつしやるのは、そのためでは御座いません。

ヘロツド　さうだ、いゝ空氣だ。さあ、ヘロデアス、客はおれ達を待つてゐるのだ。おや、滑つた！　血をふみすべつたぞ！　不吉な前兆だ。大變に不吉な前兆だ。どうして此處に血があるのだ。……それから此の死骸は、どうしたのだ、此死骸は？おれは埃及王のやうだともいふのか、客に死骸を見せないで、宴會をしたことがないといふ埃及王のやうだとも思ふのか？　誰の死骸だ？見たくもない。

第一の兵士　大尉殿で御座ります、陛下。たつた三日許り前に大尉になされました、若いシリア人で御座ります。

ヘロツド　あの男を誰が殺せと云ひつけた。

第二の兵士　自殺されたので御座ります、陛下。

ヘロツド　どういふ譯でじや？　おれは、あの男を大尉にしてやつたに。

第二の兵士　陛下。それは分りません。然し自殺されたので御座ります。

ヘロツド　それは變な事だ。おれは、自殺をするのは羅馬の哲學者ばかりだと思つた。さうではないか、チゲリヌス、羅馬では哲學者が自殺するさうではないか？

チゲリヌス　自殺するものも御座ります、陛下。あれはストア派のもので御座ります。ストア派の連中は亂暴な奴等で御座ります。馬鹿な奴等で御座ります。私はあの連中を、全く馬鹿げたものどもと、思つて居ります。

ヘロツド　おれもじや。自殺などをするのは、馬鹿くしいことだ。  
チゲリヌス　羅馬では、誰れもかれも、あの連中を笑つてをります。皇帝はあの連中に對して、諷刺の詩をおつくりになりました。その詩は到る處で、讀まれ



て居りまする。

ヘロツド は、あ！ その連中に對して、諷刺の詩をお作りなされたか？ 羅馬皇帝はるらい人ぢやのう。何でも出来るのう。……若いシリア人が自殺したのは、どうも變ぢや。自殺したのは氣の毒じや。非常に氣の毒じや。立派な男じやつたから。非常に立派な男じやつたからのう。あの男は非常に可愛い眼をしてをつた。あの男が、あの可愛い眼で、サロメを見てゐたことがあるやうに思ふ。本當にあの男は、あんまりサロメを見過ぎて居たやうだ。

ヘロヂアス あんまりあの女を見つめて居るものが、他にも御座います。

ヘロツド あれの父は國王であつた。わしはそれを國から逐拂らつたのだ。それからヘロヂアスや。お前は妃であつたあれの母親を召つかひにしたのだ。それであの男は、いはば、まあ、おれの客分として此處に居たのだ。だから、おれはあの男を大尉にしてやつた。それが氣の毒なことに死んでしまつた。コラ！

何故死骸を此處に打やつといつたのだ。見たうもない——あちらへ片附ける！

(一同死骸を持ち去る。)

此處は寒い。風が吹いてゐる。風が吹いてゐるではないか？

ヘロヂアス いゝゑ、風は吹いては居りませぬ。

ヘロツド 確かに風が吹いてるといふに。……それから、何だか空で羽の音のやうなものが、大きな羽の音のやうなものがきこえる。お前にはきこえないか？

ヘロヂアス 何にもきこえません。

ヘロツド もう聞こえない。でもさきには聞こえた。あれは屹度風の吹く音であつた。今やんだのだ。然し、いや／＼、又聞こえる。お前には聞こえないか？

丁度羽の音のやうだ。

ヘロヂアス たしかに何にも聞えはしませぬ。あなたは御病氣なのです。奥へまゐりませう。



ヘロツド おれは病氣ではない。病氣なのはお前の娘だ。病人のやうな容貌をしてゐる。あれがあんな蒼い顔をしてゐるのを見たことがない。

ヘロヂス あれの顔を、御覽なさいますなといふのに。

ヘロツド 酒を注げ。

(酒をもつてくる。)

サロメ、来ておれと一處に少し酒を飲め。此處に芳醇な葡萄酒がある。羅馬皇帝がおれに呉れたのだ。おれに此コップが干せるやうに、お前の小さな赤い唇に、これをつけて呉れい。

サロメ わたしは、渴いてはをりませぬ。

ヘロツド このお前の娘が、おれにどんな返事をしたかお前きいたであらう。

ヘロヂアス あれのいつたのは尤もで御座います。なせあなたは、あの子を終始見つめてゐらつしやるので御座いますか？

ヘロツド 熟した果物をもて来い。

(果物をもつて来る。)

サロメ、来て、おれと一處に果物をたべい。おれは果物についた、お前の小さい齒の跡を見るのが好きぢや。此果物を、ほんの少し噛んでみい、それから残りはおれが食べよう。

サロメ わたしはお腹がすいて居ません。

ヘロツド (ヘロヂアスに) お前は、此自分の娘を、どんな風に育て、来たか、今分るだらう。

ヘロヂアス 娘と私とは、王族の生れで御座います。それにあなたは、あなたのお父様は、駱駝追ひだつたのです！ それからまた、剽盜だつたのです！

ヘロツド それは嘘だ！

ヘロヂアス あなたは、嘘でないといふことを、よく御存じであらつしやいま



す。

ヘロツド サロメ、来ておれの傍へ座れ。おれはお母さんの玉座へお前を座らせてやらう。

サロメ わたしは草臥くたびては居りません。

ヘロヂアス ねえ、あの子が、あなたをどう思つてゐるか、お分りで御座いますか。

ヘロツド あれをもつて来い——え、つと、何やらだつたな？ 忘れてしまつた、さうだ！ さうだ！ 思ひ出した。

ヨカナアンの聲 見ろ！ 時刻が来た！ 豫言して置いた日がとう／＼やつて来た、神様がさう云つておいでだ。見ろ！ 豫言した日は今日だ。

ヘロヂアス あの男を黙らせて下さいませ。私しはあの聲をきくのがいやで御座います。あの男は、終始私しの悪口をいつてをります。

ヘロツド あれは何にも、お前の悪口などを云つてはゐなかつた。それに、あれは大變えらい豫言者なんだ。

ヘロヂアス 私しは豫言者といふものを信じません。未來でどんなことが起つて来るか、そんなことが人間に分るものでせうか？ 誰にだつて分りはしません。それにあの男は、終始私の悪口ばかりいつてをります。でもあなたはあれを恐がつてゐらつしやいます。……あなたがあれを恐れてゐらつしやることは、私しよく知つてゐます。

ヘロツド おれは、あの男を恐れてはをらぬ。おれは、誰も恐れては居らぬ。

ヘロヂアス 屹度、あなたは、あれを恐れてゐらつしやいます。若し、あなたがあれを恐れてゐらつしやらないなら、半年も前から、あの男を渡して呉れと云つて、わい／＼云つてる猶人ユダヤ達に、なせお渡しにならないのでせう？

第一の猶人ユダヤ 本當に、陛下、私し共の手に、あの男をお渡しになりました方が



お宜しう御座ります。

ヘロツド　もう澤山だ。おれはもう、そち達には返事をしてやつた。おれは、そち達の手にも、あの男を渡しはせぬぞ。あれは聖者だ。あれは神を見たことのある男だ。

#### 第一の猶太人

そんな筈は御座りませぬ。豫言者エリマスから後には、神様を見たことのあるものはをりませぬ。一番お終に神様を見たのは、エリマスで御座ります。近頃では、神様は姿をお現はしになりませぬ。神様は隠れておいでなさります。だから、恐ろしい禍が、此の世に出て来たので御座ります。

#### 第二の猶太人

本當に、あの豫言者エリマスが、神様を見たか、どうかといふことも、誰にも分りは致しませぬ。ひよつとすると、エリマスが見たのは、只神様の影ばかりだつたかも知れませぬ。

#### 第三の猶太人

いつだつて、神様の隠れてお出でなさる時はありやしない。神様

は、いつでも何にでも姿を現はしておいでなさる。神様は善いものゝ中にも悪いものの中にも、同じことに宿つておいでなさるんだ。

#### 第四の猶太人

そんなことを言つちやならぬ。それは大變危険な説だ。それはギリシヤの哲學を教へて居る、アレキサンドリアの學校から来た説だ。そして、ギリシヤ人は偶像信者だ。割禮さへ受けちや居ない。

#### 第五の猶太人

神様といふものは、どんな仕事をなさるか、誰にも分るものじやない。神様のやりかたは、甚だ神秘なものだ。吾々が悪だといつて居るものが善であるかも知れねば、善だといつてゐるものが悪であるかも知れない。何事も分るものじやない。何しろ神様といふものは、大變強いものだから、吾々は必ず何にでも従はなくちやならない。神様は弱いものでも、強いものでも、同じやうに、滅茶々々にしておしまいなさる。神様は誰のことも考へてはおいでなさらないから。



第一の猶太人<sup>ユデア</sup>

本當にお前のいふ通りだよ。神様は恐いものだ。神様が、強いものでも弱いものでも、打碎いておしまいになることは、丁度、人間が白に入れて殺物を搗いてるやうなものだ。それはさうと、此男は決して神様を見たんぢやない。豫言者エリアスこの方、神様を見たものはありやしない。

ヘロデアス　あれ達を黙らして下さいませ。退屈で御座います。

ヘロツド　（猶太人に）。でも、おれは、あのヨカナアンといふ男が、そち等のいふ豫言者だといふことを聞いた。

第一の猶太人<sup>ユデア</sup>　そんな筈は御座りません。豫言者エリアスの頃からは、もう三百年以上もたつてをります。

ヘロツド　それでも、此男が豫言者エリアスだといふものがある。

ナザレ人　たしかに、あの男は、豫言者エリアスで御座ります。

第一の猶太人　いゝゑ、決して、あの男は豫言者エリアスでは御座りませぬ。

ヨカナアンの聲　それ、その日が来た、主の日が来た。世界の救済者たるべき人の足音が、山の上に聞える。

ヘロツド　あれは何のことだ？　世界の救済者つて。

チゲリヌス　あれは羅馬皇帝の稱號で御座ります。

ヘロツド　然し、羅馬皇帝はユデアへはやつて来ない。たつた昨日、おれは羅馬からの手紙を、受取つたばかりだ。そんなことは何も書いてはなかつた。それから、チゲリヌス、冬中羅馬にゐたお前は、そんなことを何にも聞かなかつたかどうだ。

チゲリヌス　陛下、そのやうなことは何も承はりませぬ。私くしは稱號のことを申したので御座ります。あれは羅馬皇帝の澤山ある稱號の一つで御座ります。

ヘロツド　然し、羅馬皇帝が来られる筈はない。あの人は痛風がひどいのだ。足は象の足のやうだといふことだ。それからまた、國の事情も澤山ある。羅馬を



去るものは羅馬を失ふのだ。あの人は、来やしないだらう。それはシイザアは國王だから、来ようと思へば、来られるだらう。けれども、あの人が来ようなどとはおれには思へない。

第一のナザレ人　豫言者があんなことをいつたのは、羅馬皇帝シイザアに關係したことで御座りません。

ヘロツド　羅馬皇帝のことではない？

第一のナザレ人　さうで御座ります、陛下。

ヘロツド　ちや、誰のことをいつたのだ。

第一のナザレ人　出現なされたばかりの、メシアスのことをいつたので御座ります。

第一の猶太人ユデア　メシアスはまだ現はれやなされぬ。

第一のナザレ人　メシアスは現はれて来られたんだ。そして今方々で、奇蹟を働

いて居られる。

ヘロヂアス　ハハハ！　奇蹟だつて！　わたしは奇蹟なんか信じやしない。わたしは、あんまり澤山みたんだもの。(扈從に)わたしの扇をおくれ！

第一のナザレ人　その方は本當の奇蹟をなさるので御座ります。だから、ちよいとしたガリリイの小さい町にあつた婚禮の席で、あの方は、水を酒にかへられたので御座ります。その席に居た人が私しにそれを話したので御座ります。それからまたあの方は、カベルナウムの門の前に座つて居た、二人の癩病人を、一寸觸つたばかりで、お治しなされたので御座ります。

第二のナザレ人　いゝや、カベルナウムで治されたのは、盲目であつた。

第一のナザレ人　いゝや、癩病人にやつたよ。然しあの方は盲目もお治しなされた。

それからあの方は、山の上で天使と話をしておいでなされたんだつて。

サドカイ人　天使なんてものは居やしないよ。



パリサイ人　天使は居るよ。然し、おれはその人が、天使と話をして居たといふことは本當とは思はぬ。

第一のナザレ人　あの方が天使と話をして居られるのを、大勢の人が見たのだよ。サドカイ人　天使とではないよ。

ヘロデアス　此人達は、まあ、何といふ退屈なことを云つてるのだらう！　馬鹿くしい！　（扈從に）　サア！　わたしの扇をおくれ！　（扈從を●に渡す）　お前を見る人の顔付きをしてるのねえ。夢を見てはいけないよ。夢を見るのは夢人だけだよ。（妃扇を以て扈從を打つ。）

第二のナザレ人　それからまた、ヤイルスの娘の奇蹟が御座ります。

第一のナザレ人　さうだ、あれは確かだ。あれはだれでも嘘だとは云へない。ヘロデアス　この人達は氣がらがつてゐるのだ。あんまり長い間月を見てゐただ、黙るやうにおつしやつて下さりませ。

ヘロツド　ヤイルスの娘の奇蹟といふのは、何だ？

第一のナザレ人　ヤイルスの娘は、死んで居たので御座ります。あの方はその死んだ娘をお生かしなされたので御座ります。

ヘロツド　その男は死人を生きもどらせるのか？

第一のナザレ人　さうで御座ります、陛下。あの方は死人をお生かしなされます。ヘロツド　おれは、その男に、そんなことをさせたくない。おれはその男の、そんなことをするのを禁ずる。死んだものを生かすやうなことは、誰にだつて許しはせぬ。その男を見つけたして、死人を生かすやうなことは禁ずると、傳へてやらなければならぬ。今何處に居るのだ、その男は？

第二のナザレ人　あの方は、何處にでもおいでなされます。陛下。けれどもあの方をみつけるのは六ヶ敷いことで御座ります。

第一のナザレ人　あの方は、今サマリアに居られるといふことで御座ります。



第一の猶太人

若し、その人がサマリアに居るなら、それがメシアスでないといふことは、容易にわかることだ。メシアスは、サマリア人の所に現はれて來られる筈はない。サマリア人は呪はれて居るのだ。お寺へ何にもあげたことはありやしない。

第二のナザレ人　あの方は、二三日前にスミルナをお立ちになつた。今ごろは、エルサレムの近所にをられるだらう。

第一のナザレ人　いや、エルサレムには居られない。おれは今エルサレムから來たばかりだ。二月ばかり、あの方の様子は何にも分らない。

ヘロツド　そんなことはかまはぬ、兎も角も、その男を見つけさせて、死人を生き返へらせることは承知ならぬと傳へねばならぬ。水を變へて酒にするとか、癩病人や盲目をなほすとか、……そんなことは自分でしたければ勝手にするがよい。そんなことに對して、おれは何もいひはせぬ。本當に、癩病を治すなん

てことは善いことだ。けれども、死んだものを生き返へらせるなどは、誰にも許されぬことだ。死んだものが返つてなんぞ來ては、堪つたものでない。

ヨカナアンの聲　おゝ！　いたづら者！　賣女！　おゝ！　金の眼と、びか／＼光る臉をもつた、バビロンの娘！　神様がさうおつしやるぞよ、あの女に對して、澤山の人を集まらしてやれ。人々に石を拾つて、投げつけさせてやれ。……

ヘロヂアス　あの男を黙らせて下さりませ。  
ヨカナアンの聲　隊長どもに、劍であの女を刺させてやれ、楯の下に壓しつけてあの女を碎がせてやれ。

ヘロヂアス　本當に忌々しくてなりません。  
ヨカナアンの聲　かうして、世の中から、ありとある穢らはしさを拭きとつてしまはう。そしてあらゆる女が、あの女の罪をまねないやうにさせたい。

ヘロヂアス　わたしに對して、あの男の云ふことがお耳に入りませぬか、御自分



の妻を誹しる男を、あなたには許してお置きになりますのですか？

ヘロツド　あの男はお前の名をさしはせなんだ。

ヘロヂアス　名をささなひからといつて、それは同じことで御座いますか？あの男が陥れようとしてるのが、わたしだといふことは、よく御分りになつて居る筈で御座います。そして、そのわたしはあなたの妻では御座いませんか？

ヘロツド　さうだ、ヘロヂアス、お前は本當に、おれの可愛い、けだかい、妻じや。そして、その前には、お前はおれの兄弟の妻であつた。

ヘロヂアス　あの人の腕から、わたしをおもぎとりなされたのは、あなたで御座います。

ヘロツド　さうだ、おれの方が強かつたのだな。……然し、その話はすまい。おれはその話はしたくない。話したいのは、豫言者がいつた恐ろしい言葉の原因だ。大方その爲に、不吉なことが起るのかも知れない。いや、このことはもう

話さぬことにしよう。けだかいヘロヂアス、お客のことを忘れて居たのう。こりや、お前おれのコップに一抔ついでくれい、銀の大杯にも、それからガラスの大杯にもついでくれい。おれは羅馬皇帝のために祝盃をあげよう。此處に羅馬の方々が居られる。一同羅馬皇帝の萬歳を祝さう。

一同　羅馬皇帝！　シイザア！

ヘロツド　お前娘の顔を見るがい、何といふ蒼い顔だ。

ヘロヂアス　あの子が蒼い顔をして居ようと居まいと、それがあなたに、どうしたといふのです？

ヘロツド　まだ、あんな蒼い顔をしてるのを見たことがない。

ヘロヂアス　あなたは、あれをお見つめなされてはいけません。

ヨカナアンの聲　その日には。髪の毛の包み布のやうに、太陽が黒くならう。月は血のやうに赤くならう。熟した無花果が樹から落ちるやうに、天の星屑は地



上に落ちるであらう。そして地上の帝王達は恐をなすだらう。

ヘロヂアス　オヤ！　オヤ！　わたしは、あの男のいふやうに、月が血のやうに赤くなつて、星が熟した無花果のやうに落ちるといふ、その目が見たいものだ。此豫言者は、酔拂ひのやうなことをいつてる。……わたしには、もうあの聲の響が耐まりません。わたしは、あの聲がきらひです、黙らせて下さいまし。

ヘロツド　おれはさうしたくない。あの男のいつてることは、おれには分らないが、あれは何かの前兆であるかも知れない。

ヘロヂアス　わたしは前兆なんか信じません。あの男は酔拂ひのやうなことを云つてをります。

ヘロツド　あの男は、神の葡萄酒に酔はらつてるのかもしれない。

ヘロヂアス　神の葡萄酒つて、どんな酒で御座います？　どんな葡萄酒からとるので御座います？　どんな酒樽の中で、さきるのでございます。

ヘロツド　（これより、王はのべつにサロメを見つめて居る。）

チゲリヌス、この間お前が

羅馬を立つ時分に、皇帝が話されたといふのは……？

チゲリヌス　何のことで御座りますか、陛下？

ヘロツド　何のことだと？　あゝ！　今お

前さんに何かたつねたのだつたね。さうではなかつたかね？　えゝつと、お前さんにきかうと思つたことを忘れてしまつたわい。

ヘロヂアス　あなたは、また娘の顔を見つめてばかりわらつしやいます。あれを御覧なすつてはいけません。もうさつきも、さう申しましたのに。

ヘロツド　お前は、またそればかり云ふてるな。

ヘロヂアス　もう一度それを申します。

ヘロツド　それから、あのお寺の再造のことを、みんなが大變八ヶ間敷いうて居つたが、あれはどうなるのだ？　神殿の帳がなくなつたとかいふことだつたが



さうではなかつたか？

ヘロヂアス　それを盗んだのは、あなたで御座いました。あなたは出鱈目ばかりいつてゐらつしやる。わたしは此處に居りたう御座いません。奥へまゐりませう。

ヘロツド　サロメ、舞ふて見せてくれ。

ヘロヂアス　わたしは舞はせはしませぬ。

サロメ　舞ふのは厭で御座ります。

ヘロツド　サロメ、ヘロヂアスの娘、おれに舞ふて見せい。

ヘロヂアス　おれに構つて下さいますな。

ヘロツド　サロメ、おれは、お前に舞へと命ずる。

サロメ　舞ふのは厭で御座ります。

ヘロヂアス　笑つて。まああなたの仰をよくききますことね。

ヘロツド　おれが舞はうと舞うまいと、それがおれに何だ？　何でもないことだ。

今夜おれは愉快ぢや、非常に愉快ぢや。これまで、こんなに心持のよかつたことはない。

第一の兵士　王様は陰氣な顔をしておいでなさるではないか？

第二の兵士　さうだ、陰氣な顔をしておいでなさるなあ。

ヘロツド　どうして、おれが愉快でなからうか？　世界の主であり、萬物の主である羅馬皇帝が、よく此おれを可愛がつて下さるのだもの。丁度今もおれに至つて貴い贈物を下されたところだ。それからまた、おれの敵であるカツバドシア王を、羅馬へ呼寄せることを約束して下された。ひよつとすると、あの王を羅馬で磔刑にでもされるのかも知れない。羅馬皇帝は、したいと思ふことばなんでも出来るのだから。矢張羅馬皇帝は世界の王だ。だからこそ、おれは愉快なのだ。本當に愉快だ。今まで、此んなに愉快だつたことはない。この幸福を傷けることの出来るものは、世の中に何に一つあらうとも思へぬ。



ヨカナアンの聲　彼は此玉座に座つて居るだらう。緋と紫の衣をきて居るだらう。手には、自らの罪障を湛えた金のコップをもつて居るだらう。そして主の御使に打碎かれてしまふだらう。蛆蟲に食はれてしまふだらう。

ヘロヂアス　あの男は、あなたのことを云つて居るではありませんか、蛆蟲に食はれておしまひなるといつて居ります。

ヘロツド　あれの云つてゐるのは、おれのことではない。あの男は、決しておれの悪口はいはない。あれのいつてゐるのは、カツバドシアのことだ。おれの敵であるカツバドシア王のことだ。蛆蟲に食はれるといふのは、あの王のことだ。おれのことではない。おれが、兄弟の妻を妻にしたこと以外には、此豫言者はまだついでおれの悪口をいつたことはない。それも、あの男のいふ通りかも知れぬ。何しろお前は石女イタナメだからな。

ヘロヂアス　わたしが石女ですと？　あなたがそれを仰つしやるですね、終始わ

たしの娘ばかり見つめてゐらつしやるあなたが、御自分の慰みのために、あれを舞はせようとなさるあなたが、それを仰つしやられた義理ではありませんまい。わたしは一人は子供を生んだのですよ。あなたに子供がないのです。いゝゑ。おつきのものにも、一人も子供がないのです。うます女といふのは、あなたのことです。わたくしでは御座いません。

ヘロツド　黙れ！　女！　お前はたしかに石女だ。おれの子供は、お前には一人も出来なかつた。そしておれ達の結婚は、本當の結婚ではないと、豫言者がいつて居る。道に外れた結婚、禍の起る結婚だといつて居る。……あれのいふ通りかも知れない。屹度あの男のいふ通りだ。でも今はそんなことを云つてゐる時ではない。おれは今は愉快でありたいのだ。本當におれは愉快だ。物足らないと思ふことは何一つない。

ヘロヂアス　今夜、あなたが、それほど上機嫌でゐらつしやるのは、何より嬉し



いことで御座います。いつにない珍しいことで御座いますからね。でも、もう晩う御座いますから、奥へまわりませう。明日は日の出がたに、獵にお出かけになる筈で御座いませう。何しろ羅馬皇帝のお使者達に、出来る限りの御馳走をしなければなりませんからね。

第二の兵士　何てマア、王様は陰氣な顔をしてゐらつしやるのだらう。

第一の兵士　さうだ、陰氣な顔をしてゐらつしやるな。

ヘロツド　サロメ、サロメ、おれに舞うて見せい。頼むから舞うて見せい。今夜はおれは悲しい。さうだ、おれは今夜は悲しうてならぬ。おれは此處へ来た時に、吉相の悪い血を踏んだ。それから、空には羽の音を聞いた、たしかに巨い羽音だつた。おれにはそれは何のことだか分かんぬ。……今夜はおれは悲しいのだ。だから、おれのために舞うてくれい。どうぞ舞うてくれい、サロメ、頼むから。お前がおれのために舞うて見せれば、欲しいと思ふものは何でもいふが

、この國の半分でも、お前にやるぞ。

サロメ　(立つて) 本當にわたしの望むものを、なんでも下さいますか。

ヘロヂアス　舞ふのではありませんよ、サロメや。

ヘロツド　何でもこの國の半分でも。

サロメ　お誓ひなさいますか？

ヘロツド　誓ふとも、サロメ。

ヘロヂアス　舞ふのではありませんよ、サロメや。

サロメ　何にかけてお誓ひなさるのです？

ヘロツド　命にかけて、この冠にかけて、神々にかけて。お前が只一度だけおれのために舞ひさへすれば、お前の望むものは何でも呉れてやる、此國の半分でもくれてやる。さあ、サロメ、サロメ、おれの爲に舞うて見せい！

サロメ　あなたはお誓ひになりましたね。



ベロツド 誓うたとも、サロメ。

サロメ わたしの欲しいものを凡て、あなたの國の半分でもね。

ベロチアス サロメや、舞うのではありませんよ。

ベロツド この國の半分でもだとも。お前が此國の半分でも欲しいといふことなら、サロメ、お前は女王になつて見るがいゝ、さぞ美しいことであらう。國王になつたら、どんなにか美しいことであらうな。おゝ！此處は寒い、氷のやうな風が吹く、それから、おゝ、きこえるわ……どうして空に羽音がきこえるのだらう？はゝあ、廣場の上の方を、大きな黒い鳥でも飛んでるのかも知れない。どうしてそれが見えないのだらう。あの羽の音は凄いい音だ。羽ばたきで起る風の音は凄いい音だ。つめたい風だ。いや、さうでない、つめたくない、熱い、息がつまる。この手に水をかけてくれい。雪をくはせい。マントルをぬがせてくれい。早く！早くぬがせてくれい。いや、まあ、ほつといてくれ。苦しいの

は、この飾冠だ。薔薇の飾冠だ。花が炎えてるやうだ。額がやけつくやうだ。

額の上から花冠をもぎとつて、テェアルの上に上投げつける。あゝ！やつと息が出来る。あの花瓣の赤いことはどうだ！布についた血のやうだ。なに、かまふものか。眼に見えるものごとに、意味をつけて考へては、とても生きてをられはせぬ。血の跡でも、やつぱり薔薇の花瓣のやうに立派だと、いつた方がいゝ、なんでもさういつた方が、ずつと増しだて……然しこのことはもういふまい。もうおれは愉快ぢや、非常に愉快ぢや。おれは愉快であるべき権利があるではないかね？お前の娘は、おれのために、これから舞ふところだよ。お前は、おれのために舞うてくれるだらうね、サロメ、お前はおれのために舞ふと約束したではないか。

ベロチアス わたしは舞はせはしませぬ。

サロメ あなたのためにわたしは舞ひます。



ヘロツド 娘の云つたことを、お前は聞いたであらうな。あれはこれから、おれのために舞うてくれるのだぞ。おれのために舞うてくれる、でかしたぞ、サロメ。そしてお前がおれのために舞うたら、何でも欲しいものをくれろといふことを忘れまいぞ。お前の欲しいものなら何でもやる。此國の半分でもやる。おれは誓うたのだからな。

サロメ あなたはお誓ひになりました。

ヘロツド そしておれは、まだ誓を破つたことはない。おれは誓を守らぬやうな人間ではない。おれは嘘をつくことを知らぬ。おれは自分の言葉の奴隷だ、そしておれの言葉は國王の言葉だ。カツパドシアの王は、終始嘘をつく、だがあれは本當の國王ではない。あれは臆病者だ。それからまた、あれはおれに金を借りて返さない。あれはおれの使者に無禮さへした。あれは毒舌をはいた。けれども、あれが羅馬へ行つたら、皇帝は磔刑になさるだらう。屹度羅馬皇帝は

あれを磔刑になさるだらう。さうでないにしても、あれは蛆蟲に食はれて死ぬるだらう。豫言者がさう云つてゐた。さあ！ サロメ、どうして、ぐづくするのぢや。

サロメ 女たちが香料と七本のヴェルをもつて来て、香を脱がして呉れるのをまつてをります。

(女ども香料と、七本のヴェルをもつて来て、サロメの香をぬがせる。)

ヘロツド お、裸足で舞ふのか。それはいい！ それはいい。お前の小さい足は白鳩のやうだらう。木の上で舞うてる小さい、白い花のやうだらう。……いや、いけない、血の上で舞ふのだな。そこには血がこぼれてゐる。血の上では舞はぬがいい。吉相が悪いかも知れない。

ヘロヂアス あれが血の上で舞つたとて、何でもないはでありませぬか。あなたは、べたりと踏みさへなさいましたに。……



ヘロツド　それが、どうしたといふのだ？　まあ！　月を見い！　赤うなつた。血のやうに赤うなつた。ほう！　本當に豫言者のいつた通りだ。あれは月が血のやうにならうといつた。さういひはしなかつたか？　みんな聞いてゐた筈だ。そして今、月が血のやうに赤くなつた。さうは見えないか？

ヘロチアス。　ええ、ええ、わたしにはよく見えます、それから星は熟した無花果のやうに落ちるところです、さうぢや御座いませんか。それから太陽は髪のををつむ袋のやうに黒くなるどころです。それから地上の帝王は恐がつて居ます。その帝王の恐がるのだけは、少くも誰にでも見えます。たつた一生に一度だけ、豫言者のいつた通りでした、地上の帝王は恐がつて居ます。……奥へまゐりませう。あなたは御病氣で御座います。皆さんは羅馬へ歸つて、あなたが、氣がちがつたと仰つしやるで御座いませう。さあ、奥へまゐりませう。

ヨカナアンの聲　エドムから來るのは誰だ？　紫の衣を着て、着物の美しさに光

り輝いて、ひどく偉らさうにあるいて來るのは誰だ？　何のために、その衣は緋に染めてあるのだ。

ヘロチアス　奥へまゐりませう。あの男の聲はわたしを氣ちがひに致します。あの男がべちやく、しやべつてる間は、娘を舞はせはしませぬ。そんなに、あなたがあれを見つめてゐらつしやる間は、わたしはあれを舞はせはしませぬ。いゝゑ、どうしても、わたしは舞はせはしませぬ。

ヘロツド　立つな、オイ、こりや、立つても何の役にも立ちませぬ。あれが舞うてしまふまでは、おれは奥へはいりませぬ。舞へ、サロメ、おれのために舞へ。ヘロチアス　舞ふではありませんよ、サロメや。

サロメ　さあ、わたしは舞ひます。(七つのヴェールの舞を舞ふ。)

ヘロツド　おゝ！　見ごとだ！　見事だ！　あれは、お前の娘は、おれのために舞うたのぢや。近うよれ。サロメ、近うよれ、お前に褒美をくれてやる。お



「！ 舞ふたからには充分にしてやる。立派にしてやる。何でも欲しいものを呉れてやる。何が欲しいのちや？ いつて見るがいい。」

サロメ (跪まづいて) すぐに銀の大皿に入れて、頂きたいものがあります……

ヘロツド (笑つて) 銀の大皿へ？ うむ、成ほど、銀の皿へだな。可愛らしいことをいふではないか？ 銀の大皿の中へ、何が欲しいといふのちや、オ、可愛いい、美しい、サロメ、ユデヤ中の、どの娘よりも美しいサロメ？ 中へ、何が入れて欲しいといふのちやな！ 云つて見るがいい。どのやうなものでも持てこさせてやる。おれの寶はお前のものちや。何ちやね。サロメ？

サロメ 立ちあがつて) ヨカナアンの首です。

ヘロチアス お！ サロメや。よく云ふた。

ヘロツド いや、いや！

ヘロチアス よういふた、サロメや。

ヘロツド いや、いや、サロメ。お前はそれが欲しいのではなからう。お母さんのいふことなどきくものではない。お母さんは、いつでも悪いことばかり教へてるのだ。お母さんなんぞに構ふのではないぞ。

サロメ わたしはお母様にかまひはしませぬ。銀の大皿の中へ、ヨカナアンの首を入れて下さいといふのは、わたし自らの慰のためです。あなたはお誓ひなされました、陛下。あなたは誓言なされたことを、お忘れなさいますな。

ヘロツド さうだとも、おれは神々にかけて誓つた。おれはそれをよく覚えてをる。然しおれは頼む、サロメ。何かほかのものを望んで呉れ。この國が半分欲しいというて呉れ。さうすれば、おれはそれをお前にやる。けれど、お前が今呉れろと云つたものは、どうぞ欲しいというて呉れるな。

サロメ どうぞ、ヨカナアンの首を下さい。

ヘロツド いや、おれはそれが望ましくない。



サロメ　あなたはお誓ひなされました、陛下。

ヘロヂアス　さうだ、あなたはお誓ひなさいました。だれもかれも聞いて居りません。あなたは、みんなの前でそれをお誓ひになりました。

ヘロツド　黙れ！　誰がお前にいつてる。

ヘロヂアス　ヨカナアンの首が欲しいとは、娘もよう申しました。あの男はありとあらゆるわたしの悪口を云ひました。わたしに對してとんでもないことを云ひました。あの子が母親を、よう大事にしてゐることは、これで誰にでも分ります。あとへお引きではないよ、サロメや、お誓ひなされたのだよ、お誓ひなさいつたのだよ。

ヘロツド　黙れ、しやべるな！……さあ、サロメ、しつかりして呉れ。おれはお前に、一度としてつらくはせなんだ。しよつちうお前を可愛がつて居た。……あんまり可愛がり過ぎたかも知れぬ。だから、これからはほしいといつて呉れる

な。これは物凄いいことだ、おれに呉れるといふのは、恐ろしいことだ。屹度お前は巫山戯てゐるのだらう。胴から離れた人間の首といふものは、見ても心地のよいものではない、さうではないか？　處女の眼がそんなものを見ようといふのは、穩かなことではない。それを見て、お前に何が面白からう、いや／＼それはお前の欲しいものではない。おれのいふことを聞くが／＼。おれは大きな緑玉エメラルドをもつてゐる、羅馬皇帝の愛人がおれに贈つた、大きな圓い緑玉を眼にあてゝ見ると、非常に遠方の物事が見える。羅馬皇帝が曲馬に行かれる時には自分でそんな緑玉をもつて出かけられる。でもおれの緑玉は、それよりもずっと大きい。大きいことはよく知られてゐるのだ。世界中で一番大きな緑玉だ。どうだ。お前はそれが欲しいだらう。それを呉れといふて見や、さうすりや、お前に呉れてやる。

サロメ　ヨカナアンの首を下さい。



ヘロツド　お前はおれのいふことを聞いてゐない。さうだ。まあ我慢して、おれのいふことをきいて見い、サロメ。

サロメ　ヨカナアンの首を。

ヘロツド　いや、いや、お前はそれが欲しひ筈はない。お前はおれをこまらせるために、さういふのだ、おれが今夜ずつとお前を見つめてゐたものだから。本當に、おれは今夜お前を見つめつゝけてゐた。お前の美しさが、おれを迷はせたのだお前の美しさが、おれを堪らなく迷はせた、それでおれは、あんまりお前を見つめたのだ。だが、おれはもうお前を見つめはせぬ。物でも人でも、餘り見つめてはならぬものぢや。見つめていゝのは鏡ばかりぢや、鏡は影を見せるばかりだからな。おゝ！　おゝ！　酒をもつて来い！　咽喉が渴いた。……サロメ、サロメ、仲をよくしよう。さあ来い！……えゝと！　何やらいふのだつた？　何だつたかしら？　おゝ！　思ひ出した！……サロメ——いや、まあ、もつと

近う寄れ、きこえないかもしれぬ——サロメ、お前はおれの白孔雀を知つてゐるな、庭の中で、天人花マアツルと高い糸杉の間をあるいてゐる、あの美しい白孔雀をな。あれどもの嘴くちばしは、金がぬつてある。食べる穀物も金がぬつてある。それから孔雀の脚は紫に染めてある。あの孔雀が鳴く時には、雨が降る、尾をひろげる時には、天に月が出る。あの鳥は糸杉の樹と、黒い天人花マアツルの間を、二羽宛歩いてゐる。そしてどちらにも、おつきの奴隷がつけてある。時によると樹を飛び越えることがある。また時によると、草の中にしやがんだり、池のぐるりにしやがんだりする。世の中にあれほど珍らしい鳥はない。世界の帝王にもあれほど珍らしい鳥をもつてゐるものはない。屹度羅馬皇帝シイサアでも、あんな綺麗な鳥をもつてはおられぬ。おれはあの孔雀を五十羽ほどお前にやらう。お前の行く處へはどこへでもあの鳥はついて行くだらう。そしてお前があの鳥の真中にゐると、大きな白雲の真中に包まれた月のやうだらう。……おれはそれをみんなやらう、



おれは百羽ばかりもつてゐる。世界中にも、おれのもつてるやうな孔雀をもつた國王は一人もないのだ。然しおれはそれをみんなお前にやらう。たゞ、お前はおれの誓をゆるしてくれい、そして今呉れるといつたものを、欲しいといふてくれるな。(國王酒をのみ干す)

サロメ ヨカナアンの首を下さい。

ヘロデアス よう云うた、サロメや！ あなたはまあ、孔雀で馬鹿になつてゐらつしやるのですね。

ヘロツド 黙れ！ お前は、のべつにはざいてる。まるで猛獸のやうにはざいてる。お前の聲には、こり／＼だ。黙つておれ。……サロメ、お前の望んでることを考へて見い。此男はひよつとすると、神の御使かも知れぬ。神の指は此男に觸つたのだ。神が恐ろしい言葉を、あれの口に入れたのだ。宮殿の中でも、砂漠の中と同じ様に、神がしよつちう、あの男と一所にをられるのだ。……少

くもさうであるかも知れぬ。誰にだつて分るものではない。神があつた男を助けて、一所に居るといふことがないとも限らぬ。それに又、あの男を殺したとなると、何かの不幸がおれに起つて来ないともいへぬ。兎に角自分の死ぬる日には、誰かに禍が起るだらうと、あの男もいふて居た。その禍を蒙る人は、おれより他のものではあるまい。思ふて見るがい、おれは此處へ来る時に血を踏みすべつた。そして又、空では羽の音、大きな羽の音のするのを聞いた。みんな至つて悪い前兆だ、それからまだ他にもあるかも知れぬ。おれの見ぬことで、屹度まだ他にもあるかも知れぬ。のう、サロメ、おれに禍の起つて来るのを、お前も望みはすまい？ お前も、きつと望みはすまい。だから、おれのいふことをきいて呉れい。

サロメ ヨカナアンの首を下さい。

ヘロツト おゝ！ お前はおれのいふことを聴かないのだな。静かにせい。おれ



は——おれは落つて居る。おれは落つき拂つてゐる。きいてくれ。おれは此  
宮殿の中に、寶ものをかくしてゐる——お前のお母さんさへまだ一度も見たこ  
とのない寶だ、びつくりするやうな寶だ。四列にならべた眞珠のカラーをもつ  
て居る。銀の光で月をつなぎ合せたやうなカラアだ。月を五十も金の網の中に  
引つかけたやうだ。どつかの女王が、象牙のやうな胸の上につけて居たものだ  
お前がそれをつけると、女王のやうに美しからう。それから二いろの紫水晶も  
もつてゐる。黒い方は葡萄酒のやうだし、赤い方は水を割つた葡萄酒のやうだ。  
それから虎の眼のやうな黄色いのやら、山鳩の眼のやうな赤いのやら、猫の眼  
のやうな緑のやら、いろんなのがゐる。それからまた、しよつちう、水のやう  
な焰で炎えて居る蛋白石をもつてゐる。影の恐ろしい、人の心を悲しうさせる  
蛋白石をもつてゐる。死んだ女の眼の球のやうな、瑪瑙ももつてゐる。月が變  
れば色が變つて、日にあてると色が褪める月長石ももつてゐる。卵石のやうな

大きな、青い花のやうな、青い青玉ももつてゐる。その玉の中には波が立つて  
ゐて、その波の青い色は、月に照らしても色の變はるやうなことはない。それ  
から、貴橄欖石も、綠柱玉も、綠玉髓も、紅寶玉も、持つてゐる。赤縞瑪瑙も  
風信子石も、白瑪瑙も、持つてゐる。おれはみんなそれをお前にやつて、それ  
からまた、他のものも添えてやる。印度の國王は、たつた今、鸚鵡の羽でこさ  
へた扇を、四本贈つて呉れた。それからヌミヂアの王は蛇鳥の羽の着物を贈つ  
て呉れた。おれはまた、女は見ることをとめられて、若い男は鞭で打たれてか  
らでなければ見てはならない水晶を一つ持つてゐる。青貝の箱の中には、珍らし  
い土耳其玉を三つもつてゐる。それを額につけてゐると、ないものを想像す  
ることが出来る。手にももてゐると、女を石女にすることが出来る。みんな金  
で買はれぬ寶ものだ。値ぶみの出来ない寶ものだ。けれども、これ丈けでみん  
なでない。黒檀の箱の中には、金の林檎のやうな、琥珀のゴツブが二つある。



此コップの中へ敵が毒を盛りでもすると、それが銀の林檎のやうになるのだ。琥珀張の箱の中には、硝子張りの香が入れてある。セレスの國からとりよせたマントもある。ユウフラテスの市まちからとつた夜光球や、深緑玉フエネドで飾つた腕環もある。……これより以上に何が欲しいか？ サロメ。お前の欲しいものをいつて見い、おれは、それをお前にやる。たつた一つさへどければ、お前が呉れいといふものは何でもやる。たつた一つの生命さへどけたら、おれのものなら、何でも呉れてやる。司祭の僧のマントでもやる。祭壇の帳でもお前にやる。

猶太人等

おゝや！ おゝや！

サロメ ヨカナアンの首を下さい。

ヘロツド

背を椅子に倚せかけて

ゑゝ、欲しいといふものをやつてしまへ！

矢張

り母親の子だ！

(第一の兵士近づく。ヘロチアス國王の手から死の指環をぬいて、兵士に渡す。兵士はすぐにそれを

首斬役に渡す。首斬役がつくりしてゐる。)

誰がおれの指環をとつた？ おれの右手には指環があつた。誰がおれの酒を飲んだ？ おれのコップには酒があつた。酒が一杯あつた。だれか飲んだのだな？ おゝ！ 誰かの身に確かに禍が落ちかゝるだらう。

(首斬役水溜の中へ下りて行く。)

おゝ、何のために、おれは誓をしたのだらう？ 國王といふものは決して誓言などをするものではない。守らなければ恐いし、といつて守れば、矢張恐ろしい。

ヘロチアス 娘はよくでかしました。

ヘロツド 屹度何かの禍が起るだらう。

サロメ (水溜によりかゝりて耳をよせる。)ちつとも音がしない。何も聞えない。どうして、此人は聲をたてないのだらう？ えゝ！ わたしを殺さうとでもするもの



があつたら、聲を立てるとも、争つてやる、とるまけてなどあるものか。……  
おやりよ、おやりよ、ナアマン、おやりよ、いゝかえ。……いや、何にも聞え  
ない。ひつそりしてる、恐ろしくひつそりしてる。おや！ 何だか落つこちた。  
何だか落つこつた音がした。首斬りの劍だ。あの奴隷、恐がつてるのだ。自分  
の劍をおつことしたのだ。思ひきつて殺せないのだ。此奴隷、臆病ものだ！  
兵卒をやつて見よう。(ヘロデアスの屈従を見て呼びかける) さあ、こゝへおいで、お  
前はさつき死んだ人の友達だつたね、さうだらう？ あかね、いゝかえ、まだ  
死に人が足りないのだからね。兵卒達のところへ行つてね、下りて行つて、も  
つて来るように云つてお呉れ、わたしの貰ふものを、陛下がわたしに下すつた  
ものを、わたしの物をね。 屈従恐れて後すざりする。サロメ兵士の方へ向いて) 此處へお  
いで、兵卒たち。お前達此水溜へ下りて行つて、あの人の首をもつて来てお呉  
れ。(兵卒じり／＼とあとすざりする。)

陛下、陛下、あなたの兵卒に云ひつけて、ヨ

カナアンの首をもてこさせて下さい。

(大いなる黒き腕、首斬役の腕が、ヨカナアンの首を銀の楯にのせて、水溜から出て来る。サロメ  
れを握み取る、ヘロッド上着で顔をかきす。ヘロデアス笑つて、扇をつかつて居る。ナザレ人等跪ま  
づいて祈り始む。)

お前は、この口に接吻させなかつたのね、ヨカナアンや。さア！ わたし今  
接吻してやるよ。熟した果物を噛むやうに、わたしの齒で食いついてやるよ。  
さうだ、わたしはお前の口に接吻するよ。ヨカナアンや。わたしは前にさうい  
つたのだよ、さうだつたらう？ いつたのだよ。おゝ！ わたしは今キスして  
やるよ。……でも、どうしてお前は、わたしを見なかつたのだえ、ヨカナアン。  
お前の眼は随分恐かつたよ、随分怒つて、輕蔑して居たね、その眼が今瞑つて  
る。どうして瞑つてるのだえ？ 眼をおあけよ！ 臉をお上よ、ヨカナアンや！  
どうして、お前はもうわたしを見ないのだえ？ お前は恐いのかえ、ヨカナアン



や、それでわたしを見ないのかえ？……それから、お前の舌は、赤い毒蛇のやうだつた。その舌も、もう動かさない。もう今は何もいはない、ヨカナアンや、わたしに毒を吐きかけたあの真赤な毒蛇も、もう何にもいはないね。可笑しいわねえ、さうぢやないかえ？　あの赤い毒蛇がもう動かないつて、マアどうしたのだえ？……お前はわたしの、何でも嫌つたのね、ヨカナアンやわ。たしを刎ねつけたね。お前はわたしに悪口ついたね。お前はわたしを賣女のやうに、淫奔者のやうにあつかつたね。わたしを、このサロメを、ヘロデアスの娘を、ユデアの王女をね！　まあ、ヨカナアンや、わたしはまだ生きてるよ、でもお前は、お前は死んでるのだ、そしてお前の首はわたしのものだよ。わたし今は何でも思ふ通りに出来るよ。わたしは今、お前の首を犬に投げてやることも出来る、空をとぶ鳥に放つてやることも出来る。犬が放つてにげたら、空の鳥が来てたべるだらう。……ねえ、ヨカナアンや、ヨカナアンや、お前は、わた

しが愛しいと思つた、たつた一人の男だつた。他の男はわたしは、みんなきらひなのだ。まあ、お前は、お前は美しかつたわねえ！　お前の體は、銀の臺の上につけた、象牙の柱のやうだつた。鳩がどつさり居て、白百合の一杯さいた花園だつた。象牙の楯でかざつた銀の塔だつた。お前の體のやうな白いものは、世の中に何もなかつたわ。お前の髪の毛のやうな黒いものは、世の中にもなかつた。世界中にも、お前の口のやうな赤いものはなかつた。お前の聲は、不思議な香りの薫する香爐だつた、そしてお前を見ると、わたしには不思議な音楽が聞えた。まあ、どうしてお前はわたしを見てくれなかつたのだえ、ヨカナアン？　よくもお前は両手の蔭に、悪口の蔭に、自分の顔を隠したね。自分の神を見たがつてるもの、目隠しの布をとつて、お前は自分の眼をかくしたね。さうだ、お前は自分の神を見たゝろうが、ヨカナアン、そのくせ、わたしを、わたしを、どうしても見なかつたね。もしお前がわたしを見たら、屹度わたし







王階段を上りかける。

サロメの聲。 おゝ！ わたしはお前の口に接吻した、ヨカナアンや、わたしはお前の口に接吻した、お前の口は苦がかった。あれは血の味なのかへ？……いや、ひよつとすると戀の味かも知れない。戀は苦いものだといふことだや、だから……でも、それはどうでもいい、わたしはお前の口に接吻したよ、ヨカナアンや。

(月の光サロメの上に落ちて、明るく王女を照らす。)

ヘロツド。 (振り向いて、サロメを見て。) あの女を殺してしまへ！

(兵士等進み出て、楯をもつて、エデアの王女、ヘロデアスの娘、サロメを壓殺す。)

—幕—

隣人の愛 (アンドレエフ)



一人の男が絶望の態度で、地上から殆んど兀立したやうな、峻しい岩の小さい突

舞臺、山中の荒地。

一人の男が絶望の態度で、地上から殆んど兀立したやうな、峻しい岩の小さい突角の上に立つてゐる。その男がどうして其處に上つたかは分らない、上からも下からも其處に達し難いからである。短い梯子、綱、棒などが、分らぬ男を助けんとして、色々と企まれ、而もそれが不成功に終つたことを示してゐる。

不幸なる男は、久しく其絶望的地位にあつたもの、やうで、澤山の群集は既に集り、而も其配合が非常に雑多である。冷たい飲料の賣子が數人ゐる。小さいバアがあつて、其後ろを給仕人が息を切らし、汗をかいて跳ね廻つてゐる。——彼は手に餘る程の仕事をもつてゐるのである。繪葉書賣、珊瑚珠、土産物其他色んな下らぬものを賣るものなど。偽物の籠甲の櫛を賣らんとして、しつこくあせつてゐる男がゐる。異變が近づき迫つてゐるとの報によりて、旅行家は四方より來り集つてゐる。英米獨露佛伊等の人々、皆彼等の國特有な性質舉動服裝。殆んど凡てが皆登山用の



杖望遠鏡及暗箱をもつてゐる。話は皆異つた國語で交はされるが、今その全部を讀者の便宜の爲に日本語に譯する。

分らぬ男が落ちんとしてゐる岩の麓には、二人の警官が兒童を追拂つて、場所を区分し、地中に打込んだ短かい杭のぐるりに繩をはつてゐる。愉快げに騒がしき光景。

巡查　ごろつきども、あつらへ行つたく、あの男が頭の上へ落こつて来るぞ、

怪我でもすると、お母さんやお父さんが、大騒をやらかさうぞ。

男の子　此處へ落こつて来るの？

巡查　さうさ、此處へさ。

男の子　もつと遠方へ落つこちやしないの？

第二の巡查　子供の云ふ通りだ。あの男は自棄になつて飛ぶかも知れない、そし

て繩の外へ落つこつて、誰かの頭に打つかかるかも知れない。あれで少くも二百封度位あるだらうからな。

第一の巡查　さ、あつちへ行つて下さい、あつちへ行つて。どこへ行くんです？

あれはあなたの娘さんですか。どうかあちらへ連れて行つて下さい。若い男は直に落こつて來ますからね。

夫人　直ぐですつて？　直ぐに落つこちるんだと仰有いましたね？　おや、どう

しよう、旦那様は居らつしやらない！

少女　お母さん、お父さんはカフェに居らしてよ。

夫人　(自棄的に)え、無論ですよ。何時でもカフェにきまつてるんです。ネリイ、行つて呼んでおいでなさい。あの人が直に落ちますからつて、そいつておいでなさい。急いで！　大急ぎでね！

人々の聲　給仕！　子供——ケルナア——麥酒を三杯もつて來て呉れ！——麥酒



は無いのか——何？——おい、立派なバアだな——おいすぐもつて来て呉れ——  
—急ぎだ——給仕！——給仕！——子供！

第一の巡査　おい、子僧、お前またやつて来たな。

男の子　僕は石をどけとかうと思つたんです。

巡査　何故だね。

男の子　あの人落こつて来た時、あんまり怪我をしないやうにね、

第二の巡査　子供の云ふ通りだ。吾々は石ころをどけとかなくてはならん。全く此場をきれいにしとかなくてはならん。どつか鋸屑か砂はないかな。

(二人の英國旅行家入つて来る。二人は望遠鏡を出して不思議な男を見て、話し出す)

第一の旅人　若い男だな。

第二の旅人　幾つだろ！

第一の旅人　二十八だ。

第二の旅人　二十六だ。恐いのでふけて見えるんだ。

第一の旅人　幾ら賭るね。

第二の旅人　大抵さうだよ、止し給へよ。

第一の旅人　(ノオトに書きながら、巡査に) どうしてあそこへ上つたんです。何故皆下ろしてやらないんですね。

巡査　やつて見たが駄目なんです。梯子が短か過ぎましてね。

第二の旅人　あゝしてもう久しく居るんですか。

巡査　二日です。

第一の旅人　へえ！ 晩には落つこちるだらうね。

第二の旅人　二時間すると、屹度ね。

第一の旅人　よし給へよ。(岩の上の男に對して叫ぶ) 君、どんな氣持がするね。何だつて？ 聞えないね。



不思議な男 (辛うじて聞えるやうな聲で)。いやですね、非常にいやですね。

夫人 まあ、ねえ、そしてうちの旦那様はゐらつしやらないんだわねえ!

小娘 (駈けて来て) お父さんはやがていらつしやるんですつて。將棋をやつてゐらつしやるのよ。

夫人 まあ、ねえ! ネリイ、入らつしやらなくつちやいけないつて云つといでよ。屹度だよ。でもね、それとも、ひよつとしたら私が——あの人は直ぐ落つこちるんでせうか、お巡りさん。そんなことないんでせうか。ネリイ、お前行つといでよ。私しは此處にゐて、お父さんの場をとつとくからね。

(丈高き、瘦せた、非常にすつとした武ばつた婦人と、一人の旅人とが同じ場所を争ふ。丈の低い、種かな、寧ろ纖弱な旅人は、弱々しく其権利を防禦する。婦人は思ひ切つて攻勢の態度である。)

旅人 でも、あなた、私の場なんですよ。私は二時間も此處に立つてゐたんです。

武張つた婦人 あなたが幾時間此處に立つてゐらしたつて、そんなことを私しが

かまうものですか。私しは此所がゐるんです。お分りになりました? 此處はよく見えるんですからね、そしてそれが丁度私が求めてる所なんです。お分りになりました?

旅人 (弱々しく) それがまた私にも入る處なんです。

武張つた婦人 御免下さいまし、兎に角、あなたは斯ういふ事に關して何を御存じな、んですね?

旅人 どんな智識が入るんです。人が落つこちる。それ丈けなんです。

武張つた婦人 (眞似ながら) 『人が落つこちるんです。それ丈けです』。あなたは之まで人の落つこちたのを御覽なされたことがあるか、それを仰有つて下さる御親切が、おありでせうか。ないんですつて? えい、私しは見たことがあるんですよ。一人ではありません、いえ、三人ですよ。輕業師が二人、一人は綱渡り、



それから飛行家が三人。

旅人　それでは六人ですな。

武張つた婦人(真似ながら)　『それでは六人ですな』。まあ、あなたは勘定がお上手ですわねえ。それから、あなたはこれまで動物園で、虎が女を引裂いてるのを、眼のあたり御覧なすつたことがおありでせうか。ええ？　何ですつて？　さうです、その通りです、さあ占めた——どうぞ！　どうぞ！

(旅人、ひどくやられたといふやうな風で、肩をすくめて脇へ歩みよる。と丈の高い女は勝ち誇つて、勇氣を以て勝ち得た石を占領する。婦人は腰を下ろして、自分のぐるりに袋や、ハンケチや、ベツバアミンや、薬箱やを取りひらげ、手袋をぬいで、双眼鏡を拭き、楽しみにぐるりを見る。遂に婦人はカツフエに居る自分の良人を待つてゐる夫人の方へふり向く。)

武張つた婦人(愛嬌げに)　もし。あなたはお疲れでゐらつしやいますでせう。どうしておかけになりませんか。

夫人　おや、まあ、そんなどころでは御座いません。私の足はあの岩のやうにこわばつてるんで御座いますよ。

武張つた婦人　男の人は近頃大變無作法なんですわ。決して女に場所を譲る人なんかありません。あなたはベツバアミンをお持ちでゐらつしやいますか。

夫人(驚いて)　いゝえ、どうしてで御座います？　必要なんで御座いますか。

武張つた婦人　永らく上を見つゞけてゐらつしやると、屹度具合が悪くおなりになるにきまつてますからね。屹度ですよ。あなたはアンモニヤ水おもちないんですわね。まあ、何て無考でせうね。あの人が落つこつて來た時に、眼でもまわつたら、皆さんが、どうしてあなたを正氣にさせるんでせう？　ちや無論あなたは何も香ひ物もお持ちではないんですわ。それだとすると、まさかの時にはどなたかお世話をなさる人がおありになるのですか。

夫人(驚いて)　私は宅に申しませう。カツフエに居るんですよ。



武張つた婦人　あなたの旦那様も随分ですね。

巡査　此は誰の上衣だ。誰が此んなぼろを此處へ投げたんだ。

男の子　僕のです。あの人が落つこつて來た時に、ひどく怪我をしないやうに、僕が上衣を擴げといたんです。

巡査　あつちへ、もつて行け！

(カメラをもつた二人の旅行家同じ場所を争ふ)

第一の旅人　此所は僕が入るんです。

第二の旅人　君が入つても僕が手に入れたんです。

第一の旅人　君は今來たばかりです、僕は二日も此處を取つてゐたんです。

第二の旅人　ではなせ君は自分の影でも残しとかないで、逃げて行つちやつたんです？

第一の旅人　餓死にするわけには行かないですからね。

櫛賣(不可思議に)　籠甲や、籠甲。

旅人(野蠻的に)　えゝ！

櫛賣　本物の籠甲。

旅人　畜生。

第三の旅人——(寫眞師)夫人さん、後生です。おや、あなたは私の暗箱クラムにお臀を据えてらつしやるんですね！

小さき夫人　おや！　どこにあるんですね？

旅人　夫人さん、あなたの下にです、あなたの。

夫人　私は大變疲れてましたんでね。まあまづいカメラですね。何だかどうも氣もちが悪いが、何故かしらと思つてました。道理で、分りました。あなたのカメラに掛けてたんですわねえ。

旅人(聞えて)　夫人さん！



夫人　私はね、石だと思つてたんですよ。何だか轉がつてるものがあるんでせう、妙な恰好した石だと思つてましてね。どうしてまたさう黒いんだらうつてね。だからなんですね、あなたのカメラだつたんですね。さうでしたかねえ。

夫人(驚いて)　夫人さん、後生ですから。

婦人　どうしてさう大きいんですね。普通のカメラは小ちやいんですが、是は大變に大きいんですねえ。全くカメラなんて思ひもありませんでした。あなた私の寫眞を取つて頂けるでせうか。私し此處で山を背景にして此不思議な取合せで、一つ是非撮つて頂きたいんですがね。

旅人　あなたが私のカメラに掛けてらして、どうして寫眞が撮れるでせう？

夫人(驚いて飛上りながら)　撮れるんですつて？　いやな人ねえ。ちや、どうしてさうだと仰有らなかつたんです？　へえ、寫眞が撮れるんですか？

人々の聲　給仕、ビールを一杯！——どうして葡萄酒をもつて來たんだ——す

つと前に命じたんだぞ。——あなた、何をさしあげませう。——早くだよ。——  
すぐだよ。——給仕！給仕！妻揚枝だ！——

(肥太つた旅行家急いで、喘ぎながら、大勢の家族をつれて登場)

旅人(叫びながら)　メエリイ！　アレツク！　ジンミイ！　何處にメエリイは居るん

だ？　これは驚いた！　何處に居るんだ？

學生(陰鬱に)　お父さん。此處に居ますよ。

旅人　何處に居るんだね？　メエリイ。

娘　此處に居ますわ、お父さん。

旅人　一體お前は何處に居るんだね？(くろりと振向く)　あゝ、其處に居るんだね！  
どうしてお前は後ろに行つてゐるんだね。あれを見ろ、あれを！　まあ、お前は  
何處を見てゐるんだね？

娘(陰鬱に)　知りませんわ、お父さん。



旅人 いや、そんなことがあるもんか。思つても見るがいゝ！ あの娘はまだ一度も稻妻を見たことがないんだ。いつでも玉葱のやうに眼を圓くしてゐるが、稻光りがすると直ぐ眼をつぶるんだ。だから一度だつて稻妻を見たことがありやしない。メエリイ、お前はまた見そこなつてゐるんだな。さ、稻光りがしてゐる！ ねえ！

學生 お父さん、見てますよ。

旅人 あの子を見て居て見い。(不意に深き惘惑の調子に落ちて) あゝ、可哀相な男だ、思つても見るがいゝ！ あの高い岩から落つこちるのだらう。お前達見て見い、何て青白い顔をしてゐるんだらう！ 高い處へ上るのが、どれほど危険いことだか、お前達に分るだらう。

學生(陰鬱に) お父さん、今日はつ落こちないんでせう！

第二の娘 お父様、メエリイはまた眼をつぶりましたわ。

第一の學生 坐りませう、お父さん。屹度今日は落つこちないんですよ。赤帽がさう云ひました。僕はもう堪らないんです。お父さんは毎日朝から晩まで方々の美術館を引張り歩いてゐるんですもの。

旅人 何を云つてゐるんだね。誰の爲におれはそれをやつてゐるんだ？ お前はおれが馬鹿なことをやつてゐると思つてゐるんだね。

第二の娘 お父さん、メエリイはまた瞬きをしてゐますよ。

第二の學生 僕も堪らない。僕は此頃恐ろしい夢を見たんだ。僕は昨夕夜通し子供達の夢を見たんだ。

旅人 ジムミイ。

第一の學生 僕は瘠せて骨と皮になつちやつた。お父さん、僕はもう立つてはゐられないんです。百姓になるか豚でも飼つた方がまだましです。

旅人 アレツク。



第二の學生

あの男が本當に落つこちるんだと——然し、それは嘘だ。お父さんはどんな嘘でも、聞くと直ぐ本當になさるんですね！ 皆嘘をついてるんですよ。ベデカアの案内記だつて嘘を云つてるんでさあ。さうです、お父さんのものつてらつしやるベデカアだつて、嘘ついてるんですよ。

メエリイ(陰氣に)

お父さん、ね、皆、御覽よ、あの人落つこちかけてるんですよ。

(岩の上の男、下に居る群集に何事かを叫ぶ。一同の間に動搖が起る。「ほら、落つこちるぞ」といふ人々の聲。人々は望遠鏡をあげる。寫眞師等は烈しく動搖して、カメラをバチ／＼やり出す。巡査は男の落ちるべき場所を熱心に人拂をする)

寫眞師

おや、畜生！ どうしたんだらう？ 忌々しい！ 人が急げば——

第二の寫眞師

おい、君のカメラは閉まつてるよ。

寫眞師

畜生。

人々の聲

しッ！ 落つこちようとしてるんだ。——いや、何か云つてるよ。——

いや落つこちるんだ。——しッ！

岩上の不思議な男(かすかに)

助けて呉れ！ 助けて呉れ！

旅人

あゝ、可哀相な男だ。メエリイ、ジムミイ、ねえ、悲劇だよ。空は晴れて

天氣は美しい、そしてあの男は落つこつて、滅茶々々になつて死ななければならぬのか。それがどんなに恐ろしいことだか、お前に分るかね、アレック？

學生(退屈げに)

えゝ、分りますよ。

旅人

メエリイ、お前に分るかね。いゝかね、空はあの通りだ。人は皆樂しげに清涼劑をのんでる。何一つ氣持のいゝ愉快なことはない、そしてあの男は落ちなくてはならない。何といふ悲劇だね！ お前はハムレットを憶えてるかね。

第二の娘(直ぐ)

丁抹の王子、アルシノオルのハムレット。

ジエイムズ

ヘルシンフォオルスのだ、ねえ。自烈たいね、お父さんは！

メエリイ(陰氣に)

あの人は夜通し子供の夢を見たんだ。



アレック　お父さんは、どうしてサンドキツチを注文しないの？

櫛賣(不可思議に)　籠甲や籠甲！　本物の籠甲！

旅人(輕信して)　盗んだのかね？

櫛賣　まあ、それは思ひ附ですな！

旅人(怒つて)　盗んだんでなくても、本物だといふんだね。行つてくれ。澤山だ。

武張つた婦人(やさしく)　みんなあなたのお子さんですか。

旅人　さうです。厄介者ですよ。御覽の通り、皆世話を焼かせるものだと思つて

るんです。親子の間には何時までたつても、争の絶えることはありません。此

處にはかういふ悲劇が行はれかけてゐる、かういふ痛ましい悲劇が、——メエ

リイ、お前はまた眼たゝきをしてるんだね。

武張つた婦人　御尤もです。子供は物事に強くしなくてはなりません。でもどう

して此を恐ろしい悲劇だと仰有るんですな。屋根屋が落ちる時は、大變な高い

處から落つこちるんですよ。でも、此處ではそれが——何ですな。百呎、二百

呎ですよ。私は空から鉛のやうに落ちる男を見たんですよ。

旅人(壓倒されて)　さうですかね？

アレック　皆きいて御覽よ。空から鉛のやうにだつて。

武張つた婦人　えい、さうですとも、私は飛行家が雲の中から落つこつて、鐵

の屋根の上で滅茶々々になるのを見たんですよ。

旅人　何といふ恐いことだ！

武張つた婦人　私の悲劇だといふのはそれなんです。私は正氣に歸るまで二時間

かゝつたんです。そして其間亂暴な人達が私に水をぶつけてゐたもんだから

私はずぶぬれになつちやつたんです。それからといふもの、私はアンモニア水

をもたなければ一足だつて外へ出やしません。

(伊太利人の歌唱家及樂人の放浪隊登場　丈の低い肥つた赤髯を生やし、水つぽい鈍な大きな夢見る



如き眼附きのテノオルは非常に甘く歌ふ。ジョツケイ帽をかぶり、骨ばい背蟲の男は金切聲の上低音。悪漢風のマンドリン弾は低音。ツイオリンを弾く娘は、弾く時には眼を閉ちて白眼丈けが見える。一同は場を占めると「スル、マレ、ルシカ——サンタ、ルシア、サンタ、ルシア——」を歌ひ始める。

メエリイ(陰気に)

お父さん、ねえ皆、見て御覽よ。あの人は手を振り出したわ。

旅人 音楽をやつたからだらうか。

武張つた婦人

全くさうかも知れませんが。音楽をやるとよくかういふことがあるものです。でも其代り、ずつと早く落つこちさせるかも知れませんが。樂隊さん、あつちへ行つて下さいね！ あつちへ！

(丈の高い上向にちやれた聲の旅行家が、烈しく身振をして登場。物好きな小さい群があとなつて来る)

高い旅人

怪しからん。どうして皆助けてやらないんだ？ 淑女及紳士諸君、あ

なたがたは皆、あの男が『助けて呉れ』といふのをお聴きになつたでせう、おき

ゝになりませんか。

物好き連(一聲に)

さうだ、吾々は皆聞いたんだ。

高い旅人

そら御覽。私は明に『助けて呉れ！ 何故助けて呉れないんだ』とい

ふ聲をきいたんだ。怪しからん。お巡りさん、お巡りさん！ どうしてあなた方は助けてやらないんです？ あなた方は其處で何をしてをられるんです？

二人の巡査

吾々はあの男の落ちる爲に、此處を人拂ひをしてゐるんです。

高い旅人

それはまた氣のきいた仕事ですが、然し何故助けておやりにならない

んです？

あなた方は助けておやりになる義務があるんです。人が助けて呉れ

ると、あなた方にお願すれば、それを助けてやるのが、絶対に大切なことです。

さうではありませんか、皆さん。

物好き連(一聲に)

さうだ、全くだ。助けてやるのは大切なことだ。

高き旅人(熱心に)

吾々は邪宗の徒ではない、クリスチアンです。吾々の隣人を愛



しなくてはならない。人が助けて呉れといふ時には、それを助けるが爲には、政府は出来る限りの方法を講じなくてはならない。お巡りさん、あなた方は有ゆる方法をお講じになつたのですか。

巡査 悉く！

高き旅人 悉く残らずですか。諸君、有ゆる方法が講じられたのです。聞きたまへ、若い衆、君を助けんが爲には、有ゆる方法が講じられたのだせ。分つたかね？

不思議な男(殆んど聞えるか聞えない聲で) 助けてくれ！

高き旅人(激して) 諸君、お聞きでしたか、彼はまた助けて呉れと云ひました、お巡りさん、お聞きでしたか？

物好き連の一人(臆病氣に) 助けてやることが絶対に必要だと思ひますね。

高き旅人 尤もです。全くです。ねえ、それでこそ、私が此二時間といふもの喋

つてゐたんです。お巡りさん、お分りですか。けしからぬことだ。

物好き連の一人(少しく大膽に) 私は最高當局者に訴へるべきものだと思ひますね。

其他の人々(一聲に) さうだく！ 訴へるべきものだ。怪しからぬことだ。政府

は人民を危険の中に放棄して置くべきものではない。吾々は皆税金を拂つてゐるのだ。彼は助けてやらなくてはならぬ。

高き旅人 私しが、さう云つたんではないか。勿論吾々は告訴しなければならぬ。若い衆！ 聞きたまへ、若い衆。君は税金を拂つてゐるかね。何だと？ 聞えない。

旅人 ジムミイ、ケタイ、聞いて御覽！ 何といふ悲劇だ！ あゝ、可哀相な青年だ！ あの男は直きに落つこちるのだ、そして皆はあれに家屋税を拂へといふのだ。

ケイト(望遠鏡をもつて學究的に) お父さん、あれは家屋とは云へませんわ。家屋とい



ふ意味は――

ジエイムズ(ケイトをつれつて)

誤魔化し屋。

メエリイ(退屈げに)

お父さん、ね、皆、御覽なさいね!

あの人また落つこち始

めたわ。

(群集の中に動搖があり、寫真師の間に騷擾及絶叫がある。)

高き旅人

諸君、吾々は急がなくてはなりません。如何なる價を拂つても、彼を

助けなくてはならない。私しと一所に誰が行くんです?

物好き連(二聲に)

皆行くんだ! 皆行くんだ!

高き旅人

お巡りさん、お聞きでしたか。さあ、諸君!

(一同は烈しく身振りしながら立去る。カフェは一層快活になる。ピールのコツアの鳴る音及びピ  
イル樽を叩く音がきこえる。そして獨逸の歌が始まる。誰かと話してゐる間に、吾を忘れた給仕は  
不意に立つて飛出し、絶望的に空を見あげ、ナブキンを以て顔の汗を拭く。給仕々々といふ怒つた呼

び聲。)

不思議な男(むしろ聲高く)

ソオダ水でも呉れないか。

(給仕人驚いて空を見上げ、岩上の人を一瞥する、そして不思議な男の聲を耳にしなかつたものゝ如  
くに歩き去る。)

數多の聲

給仕! ビールだ!

給仕人

只今、只今!

(二人の酔拂カフェから出て来る。)

夫人

おや、うちの旦那様だ。早く入らつしやいよ。

武張つた婦人(不思議な男に對して手を振りながら)

もし、大變氣持が悪いんですか? へ

え?

不思議な男(寧ろ聲高く)

え、悪いんです。私しは病氣です、そしてくたびれてゐる

んです。



酔漢　おい、君飲み物が手に入らないのだね。

不思議な男　どうして手に入るものですか。

第二の酔漢　おい、君何を云つてるんだい、あの男がどうして飲み物が手に入るものかね。あの男は死にかゝつてゐるんだ、そして君はそれを誘惑して興奮させようとするんだな。おい、上の先生、吾々は随分長く君の健康の爲に飲んでゐたんだぞ。それなら君の害にはならないだらう、どうだい。

第一の酔漢　おい、行かう〜！　君は何を云つてるんだい。どうしてそれがあの男の害になるものかね。え、只爲になるばかりだ。鼓舞するのだ。聞いてくれよ、しつかり、吾々は君の爲には氣の毒には思つてるが、君は吾々を氣にしなくてもいゝよ。吾々はカフェに行つて、もう一杯やるんだ。さようなら。

第二の酔漢　ね、おい、何といふ人ばかりだ。

第一の酔漢　行かう、行かないと、あの男は落つこつてしまふよ、さうすりや、

カフェはやめつちまはあ。

（新しい旅行家の群がはいつて来る。立派な紳士たる歐洲諸新聞の通信員長が其先頭に立つてゐる。彼が入ると、尊敬と賞讃の恍惚たる囁がついで起る。數多の人々は彼を見んが爲にカフェを立去る、給仕までが聊か振り向いて、素早く、彼を一瞥し、愉快に微笑し、やがて盆から何かをこぼしながら、自分の仕事をつゞける。）

人々の聲　通信員だ！　通信員だ！　見ろ、見ろ！

夫人　おや、まあ、旦那様はまた行つておしまひなされた！

旅人　ジムミイ、メエリイ、アレツタ、ケタイ、チャアリイ、御覽よ！　あれが通信員長だよ。分るかね、一番丈の高いね。あの人の書くことは何でも擴まるんだよ。

タイト　メエリイ、お前また見てゐないのね。

アレツク　サンドキツチを注文して貰いたいな。もう、僕は我慢し切れななんだ。



人間は食はなくつちやならない。

旅人(恍惚として) 何といふ悲劇だ！ ケテイ、お前分るかね？ どんなに恐ろしいことだか考へて見るがいゝ。天氣は非常にいゝし、それに通信員長が。ノオトをお出しよ、ジムミイ。

ジエイムズ お父さん、僕はなくしちやつたんです。

通信員 その男は何處に居るんですね。

人々の聲(無るに) ほら、あすこに居るんです、彼處に！ も少し上です。もつと上です！ 少し下です！ いゝゑ、もつと上です！

通信員 どうぞ、皆さん、私しは自分でめつけます。あゝ、成程、彼處に居るんだな。フム！ 何といふことだ！

旅人 椅子は如何です？

通信員 ありがたう。(かける)フム！ 何といふことだ！ 甚だ面白い。成程、甚

だ面白い。急ぎノオトを取出し、寫眞師等に愛嬌よく、皆さん。もう寫眞をお撮りになつたんですか。

第一の寫眞師 え、撮りました。地勢の大勢の分る所を撮りました。

第二の寫眞師 あの青年の悲惨な境遇は……

通信員 さよ、うです、大變、大變面白いです。

旅人 お前きいたかね、アレック？ 此立派な通信員長は、あれが面白いんだつて、そしてお前はサンドキツチのことはかり氣にしてるんだな。馬鹿！

アレック あの人は大方もう晝飯をたべたんでせうね。

通信員 皆さん、どうぞお静に願ひます。

懇なる聲 カフェの方が静かだ。

通信員 不思議な男に對して叫ぶ) 失禮ですが、私は自分で紹介します。私は歐洲新聞

界の通信員長です。私は各新聞の特別の要人によつて參つたのです。あなたの



現況に關して少しく尋ねますが、お名前は？ 御商賣は？ お年は？ (不思議な男は何事かを口籠る)

通信員(聊か當惑して) 一寸もきこえない。始終あゝいふ風でゐたんでせうか。

人々の聲 えい、何を云つてゐるんだか、とても分らないんです。

通信員(ノオトに何事かをホツ／＼と書きながら) よろしい、あなたは獨身ですか。(不思議な男つぶやく) きこえないですね。結婚したんですか。さうですか。

旅人 獨身だと云つてゐました。

第二の旅人 いゝゑ、いつてはゐませんでした。が、勿論、結婚してゐるんです。

通信員(不注意に)

あなたは、さうお思ひですか。よろしい。さう書きませう、既

婚、子供は幾人あるんです？ 聞えない！ 三人といつたやうだな。フム！  
兎に角五人と書いとかう。

旅人 まあ、ねえ、何たる悲劇だらう。五人の子供だつて！ 思つても見るがい

！

武張つた婦人 嘘を云つてゐるんだ。

通信員(叫びながら)

どうしてさういふ處へ上つたんです？ 何？ 聞えない。もつ

と大きく！ もう一度！ 何ですつて？ (困つて群集に) 何と云つたんでせう？

あの男は恐ろしい低い聲だ。

第一の旅人 道に迷つたと云つたやうです。

第二の旅人 いや、あの男は自分でどうして、あそこへ上つたか知らないんだ

人々の聲 あの男は獵に出たのだ——岩に攀ち上つてたんだ。いや、そうではな

い！ あれは只氣狂なんだ！

通信員 皆さん！ 失禮ですが、兎に角天から落ちたんぢやない。けれども——

(疾く其ノオトに飛び／＼書をする。) 不幸な青年——子供の時から發狂の發作で苦む。

——満月の輝く光——嶮岨な岩——眠げな番人——氣がつかない——







不思議な男　みんな地獄に行つてしまへばと思ふんです。

通信員　何？　フム、なるほど——（速に書く）熱烈な愛は——黒人に平等な権利を

許す法律の強敵だ。彼の最後の詞は、『黒人をして——』

牧師（息を切らして群衆の中に突進して）　その人は何處に居るのです。あゝ、あそこに！

可哀相な青年だ。まだ誰も牧師は來なかつたんですね。ない？　難有う。私しが最初ですね？

通信員（書く）　人心を動かす劇的瞬間。——牧師が到着する——悉く不安の境に慄

へてゐる。多く涙を流しつゝあり——

牧師　御免下さい、御免下さい！　皆様、失はれたる魂は、神様と和することを望みます（叫ぶ）。若い衆、あなたは神様と和することを望みませんか。罪の懺悔をなさい。私は直にあなたに赦しを與へます。何ですと？　きこゑない。

通信員（書く）　空氣は人々のうめきを以て震動する。牧師は感動の詞を以て、犯

罪人即ち不幸なる男に勸告する。不幸なる男は涙を垂れ、かすかなる聲を以て謝する——

不思議な男（かすかに）　退かないと、頭の上へ飛んでしまふぞ、おれは三百封度あるぞ。（凡てが恐れて飛び去る。）

人々の聲　落ちるぞ！　落ちるぞ！

旅人（驚いて）　メエリイ、アレツク、ジムミイ。

逡巡（力強く）　さ、其處をどいて下さい！　逃げて下さい！

夫人　ネリイ。早く行つて、お父さんに落つこちますからつて、云つておいで。

寫眞師（失望して）　おやく、フィルムがなくなつちやつた（狂氣の如く飛まわつて、憐

れげに不思議な男を見て）　一寸行つて取つて來よう。（不思議な男を見ながら、少しく歩いて行つて、やがて又歸つて來る。）行けない、見そこなふかも知れない。情けない！　あそこに外套の中にあるんだ。一寸どうぞ、すぐ取つて來ます。困つたな。



牧師 さ、急いでね。氣を落つけて、せめて主な罪を打明けの間でも我慢なさい、小さい罪は、かまはないですから。

旅人 何といふ悲劇だ。

通信員(書く) 犯人、即ち不幸なる男は、公衆の面前にて懺悔改悛をなす。恐るべき秘密が暴露さる。銀行泥棒にして——金庫を破れり。

旅人(輕信して) 不埒者だ。

牧師(叫ぶ) 第一に殺人ですか？ 第二に窃盜ですか？ 第三に姦淫の罪を犯したのですか？

旅人 メエリイ、ジムミイ、ケタイ、アレツク、チャアリイ、耳をふさぐがい。通信員(書きながら) 群集の驚くべき激昂。——憤怒の絶叫。

牧師(急いで) 第四に神を罵つたのですか？ 第五に隣人の驢馬、牡牛、奴隸、それから其妻を欲しがつたのですか。第六に——

寫眞師(驚いて) 皆さん、驢馬ですよ！

第二の寫眞師 何處にさ？ 僕には見えない！

寫眞師(落ついて) 僕は驢馬の聲がしたやうに思つたんだ。

牧師 お目出度う、若い衆！ お目出度う！ あなたは神様と和しました。さあこれで平安な休息が得られます。——お、神様、あれは何ですな？ 救世軍だ。お巡りさん、あれを追拂つて下さい！

(救世軍の樂隊登場。男も女も制服をつけてゐる。樂器は太鼓とヴァイオリンと耳をつんざくやうな喇叭だけである。)

救世軍の男(狂ふが如く太鼓を打ちながら、鼻聲で呼ぶ) 同胞諸君——

牧師(救世軍の男の聲を消さんとして、尙一層の鼻聲で一層高く叫んで) あの人はもう懺悔した

のです。皆さん、あの人が懺悔をして神様と和したことを證明して下さい。

救世軍の男(岩の上に上りながら叫んで) 私は丁度此罪人のやうに、嘗て闇にさまよう



たことがあります。そして悪い生活をして酒飲みになりました、けれども其時  
真理の光が――

聲　　おい、あの女はまだ酔拂つてるんだ。

牧師　　お巡りさん、あの人は懺悔をして、神様と和しましたですね。

(救世軍の男は其太鼓を狂的に打ちつゝける、他の連中はものうげに歌ひ始める。叫聲、笑聲、口笛。  
カフェに於ける歌、各國語にて『給仕』の呼聲。牧師に引つげられて當惑したる巡査二人は、俄然と  
して牧師の手を離れて逃げ出す。寫眞師等は振向いて、足元から火事が起つたことくに罵りさわぐ。  
一人の英國婦人が驢馬に乗つて登場。驢馬は俄かに立止まつて、あがきをなし、それより進むことを  
拒み、更に騒ぎを加へる。やがて漸次に騒が静まる。救世軍の樂隊は眞面目に退場、牧師は手を振り  
ながら後に従ふ。)

第一の英國旅行家(第二の男に)　　何といふ無作法だ！　此群集は禮義を知らない。

第二の英國旅行家　　さ、あつちへ行かう。

第一の英國旅行家　　一寸(叫ぶ)おい、君は急いで落ちないのかね。

第二の英國旅行家　　何を云つてるんだね、キリアム君。

第一の英國旅行家(叫ぶ)　　皆が何の爲に待つてるかい、君には分らないんだね。

君は紳士として、一同に此快樂を興へなくてはならない、そして此一揆の前に  
苦を受ける屈辱を逃れなければならぬ。

第二の英國旅行家　　キリアム君。

旅人(狂的に)　　ねえ　　全くだ。アレック、ジムミイ、全くだよ。何といふ悲劇だ！

種々の旅人(英人の方へ進んで)　　どうするんですね。

第一の英國旅行家(一同を押しつけて)　　急いで落ちたまへ！　分つたかね。君に脊骨

がなければ、僕かピストルで助けてつかはさう。

人々の聲　　あの赤毛の悪魔は確に氣が狂つてるんだ。

巡査(英人の手をつかんで)　　あなたにさうする權利はありません。それは法律に反して  
ゐます。私はあなたを捕縛します。



二三人の旅人 野蠻な國民だ！

(不思議な男、何事かを叫ぶ。激昂が下に起る。)

人々の聲 聞け、聞け、聞け！

不思議な男(聲高に) あの馬鹿者を悪魔にやつてしまへ。あれはおれを撃たうとい

ふのだ。そして親方に最う堪らないと云つてくれ。

人々の聲 あれは何のことだ？ どんな親方だ？ 可哀相に、あの男は氣が狂つ

たのだ。

旅人 アレツク！ メエリイ！ これは氣狂の場面だ。ジンミイ、お前はハムレ

ットを覚えてるか。さ、どうだ。

不思議な男(怒って) おれの脊柱がこはれたと云つてくれ。

メエリイ(退屈げに) お父さん、ね、皆、あの人は足でけり始めたんですよ。

ケイト お父さん、あれが瘡れんといふもの？

旅人(有頂天に) おれは知らない。さうだらうと思ふ。何といふ悲劇だ？

アレツク(澁面にて)

お父さんは馬鹿だね！ ぐづくと詰め込んでばかりゐて、

それが苦痛だとはお分りないんですね。そして、また眼鏡まで掛けて。お父さ

ん、僕はもう堪らないんです。

旅人 お前達、考へて見るがい。一人の男が落ちて死なうとしてゐる、そして

自分の脊骨のことで頭を悩ましてゐる。

(騒ぎがある。白チョッキの男が甚しく驚いて、怒つた旅行家等に殆んど引づられるやうにして登場。彼は微笑して四方八方に辭儀をし、其腕を延ばして、押されては前に走り出で、又群集の中に逃れんとするが、再びつかんで引ばられる)

人々の聲 素面の詐僞だ！ 亂暴至極だ。お巡りさん、お巡りさん、彼に教訓を

與へてやらなくてはならない！

他の人々の聲 何だね？ どんな詐僞だ？ 一體どうしたんだ？ 泥棒をつかま



へたんだな!

白胴衣の男(ニコノ)と辭儀をしながら　冗談です、皆さん、冗談です、それだけなんです。皆さんが退屈してらつしやるから、それで少しばかりお慰にと思つたんで御座います。

不思議な男(怒って)　親方!

白胴衣の男　一寸待つてくれ、一寸。

不思議な男　次の降來節まで、此處に待たせようつてんですか。約束は十二時までだつたんですよ。今何時ですわね。

丈高き旅人(怒って)　皆さん、おき、ですか。此悪黨、此處に白い胴衣を着てゐる

此男は、あの上にある悪黨を備つて、只岩の上に結へつけといたんです。

人々の聲　結へられてる?

高き旅人　さうです、結へられてるんです、それで落ちられないんです。吾々は

昂奮する、心配する、だから落ちようと思つても駄目なんです。

不思議な男　その外にどうしようといふんです。だつて十圓ばかりで、脛の骨を折るだらうとも思ふんですか。親方、もうたまりません。一人の男は私を射たうとしました。牧師は二時間も私に説教しました。此は約束の中にはなかつたんです。

アレック　お父さんべ、デカアだつて嘘をつきますからね。あなたは誰の云ふことでも、何でも信じて、飯も食はさないで、人を引ばり廻されるんですわ。

白胴衣の男　皆さんが退屈してらつしやる。それを慰めよう、私しの望はそれだけです。

武張つた婦人　何事なのです。私しには一寸も分りません。どうしてあの人は落つこちないのです。ちや、誰が落つこちるんです?

旅人　私にも何も分らないです。勿論あの男は落ちることになつてたんです!



ジエームズ　お父さんは、決して何も分りはしないんです。あの人は岩に結へられてたといふぢやありませんか。

アレック　そんなこと云つたつて、お父さんには駄目だ。お父さんは自分の子よりか、ベデカアの方が好きなんだ。

ジエームズ　いゝお父さんね！

旅人　しッ！

武張つた婦人　どうしたんですね。あの人は落つこちなくちやならない。

丈高き旅人　考へたものだ！何といふ詐偽だ。君は此を説明しなければならぬ。

白胴衣の男　皆さんが退屈してらしたんです。御免下さいまし、皆さん、然し皆さんのお慰めつもりで——皆さんに暫く愉快な刺戟を供給し——皆さんの元氣を引立たせ——愛他的の感情を鼓舞するつもりで——

英國人　カフェは君のですか。

白胴衣の男　さうで御座います。

英國人　それから下のホテルも矢張？

紳士　さうで御座います。皆さんが退屈してゐらつして——

通信員(かきながら)　カフェの持主が、酒を賣つて儲けやうと思つて、人間至上の感情を利用する——人々の憤怒——

不思議な男怒つて　親方、直ぐに下ろしてくれませんか、駄目ですか。

旅館の番頭　そこでどうしようといふのだ。お前は満足してゐるのではないか。夜はお前を下ろしてやつたではないか。

不思議な男　それは無論でさあ。あなたは亦、私が夜も此處にゐなければならぬといはれるんですか。

旅館主人　ではお前も少し位堪えられるだらう。皆さんが退屈だらうから——  
丈高き旅人　ねえ、君は自分でやつたことに何か考があるのかね。不埒千萬ぢや



ないか。君達は自分の野卑な目的の爲に、不都合にも隣人の愛といふ人間最美の感情を利用した悪黨だ。君は哀憐を以て吾々の心情を毒したのだ。そして今其凡ての結果は何だ？ 其結果は此悪黨、君の不都合な同伴者が、岩に縛られて、人々の豫期することく落ちないばかりでなく、落ちることも出来ないといふことだ。

武張つた婦人　どうしたのです。あの人は落ちなければならぬ。  
旅人　お巡りさん！　お巡りさん！

(牧師息を切らして入つて来る)

牧師　何です。あの人はまだ生きてゐるんですか。お、あすこにゐる。あの救世軍の連中は何といふ詐欺師だらう。

人々の聲　あの男は結へられてるつてことを知りませんか。

牧師　結へられてる！　何に結へられてる？　人生に？　さうですとも、吾々は

皆、死が綱を断ち切るまでは、悉く人生に結へられてるのです、けれどもあの人が結へられてゐようがまいが、私はあの人を神様と仰よしにさせたのです。そしてそれで澤山です。けれどもあの詐欺師どもは――

旅人　お巡りさん！　お巡りさん、あなたは報告書を書かねばなりません。その他に方法はありません。

武張つた婦人(旅館の持主の前へ進んで)　私は馬鹿にされては承知しません。私しは飛行家が屋根の上へ落つこちて、滅茶／＼になるのを見ました。私は虎が女を引裂くのを見ました――

寫眞師　私はあの悪黨を寫さうと思つてフィルムを三枚臺なしにした。あなたは此に對してまどはねばなりません。私はあなたに責任があると思ひます。

旅人　報告書だ！　報告書だ！　何といふ素面の詐欺だ。メエリイ、ジムミイ、アレツク、チャアライ、お巡りさんを呼べ。



旅館の番頭(絶望して退きながら)

でも私は、あの男が落ちたくなければ、落すこと

は出来ません。皆さん、私は力の限りを盡しました。

武張つた婦人 私しは承知しません。

旅館の番頭 御免下さい。私は名譽にかけて、此次にはあの男が落ちることを誓

ひます。けれどもあの男は、今日は落ちることを望んでおられません。

不思議な男 それは何のことです。次の度にどうですと?

旅館の番頭 其處に閉ぢこもつてゐる?

不思議な男 十弗で?

牧師

まあ何といふ鐵面皮だ! あの人が生命が危険だつた際に、私は神様と仲

よしにさせたのです。それにあの人は私の頭の上へ落ちるといつて脅してゐました。さうでしたね。そしてまだ不満を抱いてゐるのです、姦淫、盜棒、殺人そしてお隣の驢馬をねらつた男——

寫眞師 皆さん驢馬です!

第二の寫眞師 何處に、何處に居るのだ、驢馬が?

寫眞師(落つて) 聲がしたやうだつた。

第二の寫眞師 驢馬は君だ。僕は君が餘り驢馬だといふものだから、斜視カマシになつてしまつた。

メリイ(退屈げに)

お父さん、ね、皆、御覽なさいね。お巡りさんが来てよ。

(激昂と騷擾。一方には群集が、他方には旅館の番頭が巡査を引ばる、兩方とも「御免下さい!」と叫びつゞける)

旅人 お巡りさん、あすここに居るのです、詐欺師のペテン師が。

牧師 お巡りさん。あすここに居るのです、姦淫、殺人、そして隣人の驢馬をねらつた男が——

巡査 御免下さい、皆さん。間もなくあの男を正氣にもどらせて白状させま



せう。

旅館の番頭

私はあの男が望まぬとすれば、落つこちさせることは出来ません。

巡査

おい、こら、その若い男、お前は落ちることが出来るか出来ないか、白

状した!

不思議な男(陰氣に)

私は落ちたくないです!

人々の聲

アハア、白状した。何といふ悪黨だ!

丈高き旅人

お巡りさん、私の云ふことをお書き下さい——『利益の爲に——隣

人の愛情——神聖なる感情を利用せんとして——あ——あ——あ——』

旅人

お前子供達、皆きけよ、報告書をかいてゐる。何といふいゝ言葉の撰び方

だ!

丈高き旅人

神聖なる感情は——

巡査 痛ましくあせつて、書きながら、舌はこわばつてゐる)

隣人の愛——神聖なる感情は——

メエリイ(退屈げに)

お父さん、皆さん、御覽なさいね! 廣告が来てよ。

(喇叭や太鼓をもつて、樂隊が登場する、先頭の男は、長い棒の先に大きな貼札をつけて、それには全く禿頭の繪と、其下には「私は禿けてゐました」とかいてある)

棒をもつた男(立ち止つて大聲に語る)

私は生れた日から、その後暫く禿頭だつたの

で御座います。私が十歳の時に少しばかり生えた毛は、本當の髪の毛といふよ

りも、寧ろ羊の毛のやうで御座いました。私が結婚しました時には、頭は枕の

やうにつるんとしてゐました、そして若い花嫁は——

旅人

何といふ悲劇だ! 新しく結婚して、さういふ頭で——(子供に)どんなに恐

ろしいことだか分るかね、お前達?

(凡て興味をもつてきいてゐる、巡査も自分の骨の折れる仕事をやめて、手にハンをもつて耳を傾けてゐる。)

棒をもつた男(嚴格に)

それから私の結婚の幸福が、實際に髪の毛にかゝつてゐる



時が来ました。藪醫者の勧めた有ゆる毛生え薬は――

旅人 お前のノオトだ、ジムミイ。

武ばつた婦人 けれどもあの人は、何時落つこちるのです

旅館の番頭(愛うしく) もし、此次で御座います、次の度で御座います。此次はあ

まりひどく結へますまい――ね、お分りになりましたか。(幕)

大正拾年四月一日 印刷  
大正拾年四月五日 發行

【定價金八拾五錢】  
【送料金八錢】

若月

著者 若月保治

發行者 林 泰

發行者 梅 澤 文 治

印刷人 筒井久太郎

印刷所 三松堂印刷所

發行所 東京市神田區錦町三丁目五番地  
極光社

電話 振替 東京 三三二二二







終

